

今年もカツオ水揚げ日本一をめざして

■と き — 2012年6月6日(水) 午後1時から6時30分

■ところ — サンマリン気仙沼ホテル観洋

■共 催 — 気仙沼漁業協同組合・気仙沼水産業グループ運営会議

一般財団法人東京水産振興会・社団法人漁業情報サービスセンター

■後 援 — 気仙沼市・気仙沼商工会議所・社団法人全国近海かつお・まぐろ漁業協会
北日本漁業経済学会



2013年3月

発行：一般財団法人 東京水産振興会
社団法人 漁業情報サービスセンター

プログラム

コーディネーター：二平 章（漁業情報 SC・茨城大学地総研）

村田次男（気仙沼漁協専務理事）

司 会：菅原克彦（みなと気仙沼大使）

主催者挨拶：佐藤亮輔（気仙沼漁協代表理事組合長・気仙沼水産業グループ運営会議代表）

川口恭一（漁業情報サービスセンター会長）

来賓挨拶：臼井賢志（気仙沼商工会議所会頭）

三鬼則行（全国近海かつお・まぐろ漁業協会会長）

趣旨説明：コーディネーター

第 1 部 シンポジウム

◎報告

1. 魚と放射能のはなし 13：15－13：45

森田貴己（水産庁増殖推進部研究指導課水産研究専門官）

2. 東日本大震災と復興問題 13：45－14：30

馬場 治（東京海洋大学教授）

3. 水産基地気仙沼の復旧と復興計画 14：30－14：45

菅原 茂（気仙沼市長）

◎リレートーク 15：00－16：00

沿岸漁業者、水産加工業者、市場、青年、女性、気仙沼応援メッセージ

◎気仙沼元気アピール 16：00－16：15

第 2 部 交流会「気仙沼の魚料理を楽しむ」 16：30－18：30

カツオ、フカヒレ、メカジキなど気仙沼のおいしい魚料理・水産加工品がもりだくさん、気仙沼の食の達人たちが腕をふるいます。（会場：サンマリン気仙沼ホテル観洋 3 階）

プロフィール

【報告】

森田貴己（もりた・たかみ）

京都大学農学部水産学科卒業後、水産庁入庁。現在、水産庁増殖推進部研究指導課水産研究専門官。専門は海洋生物学・環境放射能。農学博士。

馬場 治（ばば・おさむ）

東京大学農学部水産学科卒業。東京大学大学院農学系研究科博士課程修了後、東京水産大学資源管理学科助手を経て、現在、東京海洋大学海洋科学部海洋政策文化学科教授。専門は水産経済学。農学博士。

菅原 茂（すがわら・しげる）

1958年宮城県気仙沼市生まれ。東京水産大学（現東京海洋大学）水産学部卒業後、株式会社トーメン（現豊田通商）勤務。その後、株式会社菅長水産、衆議院議員小野寺五典氏公設第一秘書を経て、現在、第2代気仙沼市長

【リレートーク】

横山ノリコ（魚問屋経営）

渡會かおる（全日本海友婦人会気仙沼支部副支部長）

齋藤千津（気仙沼つばき会）

菅野一代（沿岸漁業者）

木村玲子（気仙沼市教育研究会食育部会長、気仙沼市立馬籠小学校校長）

鈴木玲子（気仙沼市婦人会連絡協議会会長）

上田勝彦（水産庁増殖推進部研究指導課 情報技術企画官）

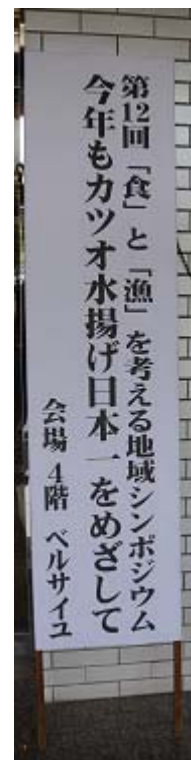
【コーディネーター】

二平 章（にひら・あきら）

1948年茨城県大子町生まれ。北海道大学水産学部卒業後、茨城県水産試験場で長く研究員生活。東京大学海洋研究所研究員、東京水産大学非常勤講師、立教大学兼任講師などを兼任。現在、茨城大学地域総合研究所客員研究員、社団法人漁業情報サービスセンター技術専門員、北日本漁業経済学会会長。農学博士・技術士（水産部門）。2001年にカツオの回遊行動研究で水産海洋学会宇田賞受賞。「カツオの自然誌」を高知新聞に連載中。

村田次男（むらたつぎお）

1947 年 2 月気仙沼町内ノ脇生まれ。東北大学農学部水産学科を卒業後、宮城県に勤務し、水産業改良普及事業、沿岸漁業構造改善事業、水産物流通・加工振興事業、漁業調整事業に従事し、2006 年 3 月県庁退職。同年 6 月から気仙沼魚市場卸売人である気仙沼漁業協同組合に勤務し、現在代表理事専務。



司会： 定刻の 1 時となりました。皆様、本日は平日の日中、大変ご多忙の折、かくも盛大なご参集を賜りまして、まことにありがとうございます。私、本日のシンポジウムで司会進行を担当させていただきます、気仙沼市魚町出身、菅原市長より「みなと気仙沼大使」を拝命しております菅原克彦と申します。気仙沼市出身の私にとりまして、この待遇、大変な誉れと存じております。本日は一生懸命努めさせていただきます。皆様どうぞよろしくお願い申し上げます。



さて、民謡歌手の三橋三智也さんの名作、気仙沼音頭の 2 番の歌詞にこのようなくだりがございます。「積んだ鰹は、万々両よ。あれは気仙沼 灯が見える」。灯と言いますのは、ともしびのことです。気仙沼は日本一、いや世界一のカツオの町です。私たち気仙沼の人間も、カツオとともに育ってまいりました。私の実家のハンバーグは、カツオのミンチでした。そういう家庭で育ちました。そして今日は大変すてきなニュースがございます。皆様、報道等でもうご存知かと存じますが、今年初めてのカツオの入港を本日迎えました。6 月 6 日水曜日、大変な記念日となったわけです。入港していただきましたのは、静岡県浜平丸、水揚げトン数は、40 数トンです。まき網船です。考えてみますと、震災復興の第一歩となりました、去年のまき網船の入港の最初の船も、静岡県の船でした。静岡県は宮城県のがれきを引き受けてくださったり、いろいろな面でご協力をいただいております。そして気仙沼のカツオにもご協力を頂いております。本当に静岡県様様といったところでしょうか。本日水揚げされましたカツオは、後ほど皆様にたっぷり味わっていただきたいということでございます。どうぞ楽しみにお待ちください。

それではお待たせいたしました。ただいまより気仙沼初開催、第 12 回「食」と「漁」を考える地域シンポー今年もカツオ水揚げ日本一をめざしてーを開会いたします。はじめに主催者、気仙沼漁業協同組合代表理事組合長・気仙沼水産業グループ運営会議代表の佐藤亮輔がご挨拶申し上げます。

主催者挨拶

佐藤 亮輔

(気仙沼漁協 代表理事組合長・
気仙沼水産業グループ運営会議 代表)



今日、6月6日、カツオをもって入ってきた船が、気仙沼の魚市場に入港してこられました。このシンポジウムをお祝いしているか、応援しているか、そのような気持ちにして、大変うれしい気持ちであります。これは私一人ではなくて、気仙沼市民みんなの思いだろうと思っております。そのシンポジウム開会にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。本日、東京水産振興会、漁業情報サービスセンター、気仙沼漁業協同組合、そして気仙沼水産業グループ運営会議の共催により、「第12回「食」と「漁」を考える地域シンポ・今年もカツオ水揚げ日本一をめざして」を開催いたしますが、皆様にはお忙しい中、また遠路この被災地まで足をお運びくださいまして、まことにありがとうございます。

このシンポジウムは、日本有数の漁業基地である気仙沼地域の復旧状況とこれからの復興に向けての取り組みや課題について掘り下げてお話しを頂くとともに、本日から出荷されるカツオなどの水産物、放射能によるさまざまな問題も克服して、全くの安全であることを全国、そして世界に向けてアピールすることが目的でございます。来賓として出席賜りました気仙沼商工会議所・臼井会頭様、全国近海かつお・まぐろ漁業協会・三鬼会長様には、ご指導、ご助言をお願いいたしますとともに、シンポジウムでご報告を頂く水産庁増殖推進部研究指導課の森田様、上田様、東京海洋大学の馬場先生、そして菅原気仙沼市長さんには、よろしく願いを申し上げます。

当気仙沼地域を含む三陸沿岸地帯は、もうすぐ東日本大震災から1年と3カ月が経過しようとしています。大震災襲来直後は、どのように復旧させればいいのか、全く途方に暮れる状況にありましたが、昨年は何とか生鮮カツオ水揚げでは、15年連続で日本一の座を堅持することができました。これも水産庁、中小企業庁、復興庁など、国、県、市の行政当局、そして日本国内各界の各層はもとより、ワールドビジョンさんのように、世界各地の皆さんから、気仙沼がんばれとの熱い声援、支援の賜物であり、この場をお借りして心から感謝を申し上げます。当地域では、すぐ目前に世界三大漁場である、三陸漁場を有し、優秀な漁船も多く輩出していることから、水産業を基幹産業として発展してまいりました。しかし震災によって、大部分の漁港施設、機能が被災し、また一からの出直しというようなことになります。このシンポジウムで皆様とともに、水産業を基幹産業とする当地域の復興の在り方について、もう一度この場で考えたいと思います。ご参会の皆様には本シンポジウムの趣旨をご理解賜りまして、実り多きシンポジウムとなりますように、ご協力の

ほどお願いを申し上げます。

第2部の交流会では、気仙沼の魚料理を楽しむ会と題しまして、カツオをはじめとして、気仙沼産の水産物を楽しんでもらうとともに、ご参会の皆様の交流と親睦の場として、楽しんでもいただければ、主催者として大変うれしく思います。ぜひ引き続きのご参加をお願い申し上げます。

結びに、私たちの美しい郷土、気仙沼の、一日も早い復旧と復興と、ご参会の皆様のご健勝はもちろん、ご繁栄を祈念申し上げまして、開会の挨拶といたします。



主催者挨拶

川口 恭一

(社団法人 漁業情報サービスセンター 会長)



皆様、こんにちは。海洋情報をインターネットで発信しております「エビスくん」というブランドをご存知かもしれませんが、漁業情報サービスセンターの川口と申します。本日は、「食」と「漁」を考えるシンポの開催をいたしましたところ、多数の皆さんにお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。講師の先生方はもちろん、商工会議所の会頭さん、近海かつおの会長さんに来賓としてお越しいただきました。よろしく願いしたいと思います。

振り返れば昨年、3月の大震災以来、皆さん非常にごがんばっていただきまして、一丸となって立ち上がって、6月にはもはや第1船の水揚げをされております。そして15年連続でカツオの水揚げ日本一という状況を作られました。で、今年も16年を目指してがんばりましょう、というのが今日の趣旨でもあるわけです。

私どもの団体は、東京の豊海水産埠頭という築地市場から少し行った所にあるのですが、そういう事務所にありまして、「食」と「漁」を考える地域シンポを開催してまいりました。今回が12回目になります。ちょうど2年あまりの間に開催してきたのですが、北は北海道の釧路から南は鹿児島にいたるまで、全国あちこちの要望に応じて開催をしているわけでございます。資源の話もあれば、漁業の話も流通の話も価格の話も、あるいは地域振興の話、いろんな内容がございまして、「食」と「漁」ということで、食文化を含めて、熱く皆さんの思いが語られる、そういうシンポでございます。

ちょうど今から300年ぐらい前の話になりますけれども、ご存知の「目には青葉山ほととぎす初鰹」という俳句がございました。芭蕉と親交のあった山口素堂が歌った歌です。この気仙沼は、江戸時代に紀州からカツオの釣船が入って来て、それが鰹節として銚子経由で、江戸に運ばれていったようでございます。昨日今日の話じゃないのですね。300年前から、カツオと気仙沼は非常に密接な関係がある、そういう地域です。その伝統が今でも引き続いているという、大変うれしい話だと思います。銚子には海産物を扱う海鮮問屋がありましたが、その名に別名気仙問屋という問屋さんがありました。もっぱら気仙沼の荷物、水産物、海産物を専門に扱う問屋さんが銚子にあったのです。それだけ江戸に向けて、気仙沼とのつながりが深かったということがあるのだと思います。当時36隻のカツオ船が、気仙沼を基地にして活躍をしたと、という記録もあるようでございます。そういうふうに、カツオと関わりが非常に深い気仙沼でございまして、長い歴史もあるわけですね。三百数

十年にまたがるカツオの歴史がある気仙沼。このシンポジウムを一つの契機にしまして、みんなの気持ちが一気に強固に高まって、気仙沼の水産業、そして市の復興の推進というものに、いくらかでも貢献できれば大変うれしく思います。限られた時間ではございますが、皆様の活発なご意見を頂きまして、有意義なシンポジウムになりますようお願いいたします。そして第 2 部も楽しく迎えますようお願いをして、開会のご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。



来賓挨拶

臼井 賢志
(気仙沼商工会議所会頭)



皆様、こんにちは。気仙沼商工会議所の臼井です。本日のシンポジウム開催を喜び、主催、共催各団体のご努力に深い敬意を表します。11 回に及ぶ全国各地でのシンポジウムの開催は、その継続の意義が非常に高いものがあり、そこで提言され論議された内容は、日本の食と漁に関するそれぞれの時期の問題点を浮き彫りにして、漁業界を中心に、広くインパクトを与えるものであると思います。

3.11 の大震災で大きな被害を受け、主要産業の漁業とその関連業界に、壊滅的な打撃がもたらされた気仙沼にとって、今復興への途上にあるこの時期に、「食」と「漁」を主題にするシンポで、災害と水産業の実態を明らかにし、今後の日本の魚食を支えていく役割を確認することは、大変有意義だと考えております。基調報告では、市長から復旧・復興の現状と計画についてご報告があり、また原発事故に起因する放射能汚染や、風評被害など、魚の放射能に関する理解を深める基調報告も行われますことは、まことに人意にかなうものと思います。これは水産業者はもちろん、市民の重大関心事の一つであるわけで、わかりやすく実態と対応策が語られますことは、大変意義あることと存じます。さらに漁業者、加工業者、市場関係者などによるリレートークの中で、気仙沼の現実と将来に関して、生の声が出されることも、また願ってもない機会となると思います。

さらに第 2 部においては、スローフードの観点から、魚料理や加工品を紹介展示して、気仙沼独自の食文化をアピールする企画がなされ、震災によって一時低下した食需要の喚起に資することとなっており、これもまた気仙沼復興の大きな要素として高く評価されるところです。食文化の独自性のアピールは、多くの地域で町づくりの主要テーマとなっております。気仙沼の場合、本月初水揚げされたカツオをはじめ、フカヒレ、メカジキ、そしてサンマなど全国に知られた水揚げを持ち、これらの生鮮魚や加工食品は、他の追随を許さないほどの実績を示しています。震災被害によってダメージは受けましたが、業界の皆さんの、勇気と懸命な復興努力に、少しずつ以前のレベルへと回復を始めておりますことは、非常に心強いところであります。復興達成までには、5 年、10 年というスパンを要すると言われておりますが、その期間をいかに縮小するか、それは国レベルによる公助、全国的な支援の共助、そして被災地の人々の自助による復興によって達せられるわけですが、このシンポジウムがそれらの力をさらに誘発する契機となりますことを期待し、私のお祝いの言葉といたします。

来賓挨拶

三鬼則行

(全国近海かつお・まぐろ漁業協会会長)



皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介をいただきました全国近海かつお・まぐろ漁業協会の三鬼でございます。初めに昨年 3 月 11 日に発生した東北地方大震災につきましては、関係者のご協力により、復帰後の取り組みが進められており、漁業関係者を含め、地域の皆様の日も早い復興を心から待ち望んでおります。また併せて、震災で犠牲になられました方々に、改めて心からお悔やみを申し上げます。

さて、本日は第 12 回「食」と「漁」を考える地域シンポが、ここ気仙沼で開催されました。気仙沼の皆様におかれましては、昨年の震災以降、復旧復興に向けたさまざまな取り組みの中で、開催するということで大変ご苦勞をかけたことに対し、心からお礼を申し上げます。近海かつお・まぐろ漁にとって、気仙沼は極めて重要な漁業の地であります。近海マグロはえ縄漁船のみならず、全国の近海カツオ一本釣り漁業漁船が、まもなくカツオの群れを追って、三陸の東沖操業に入れば、連日たくさんのカツオが水揚げで、港が大きな賑わいを見せるものと信じております。昨年は港湾施設の破壊に加え、福島原発の問題で三陸沖そのものがどのようなになるのか、大変心配しましたが、気仙沼漁業協同組合の佐藤組合長および漁協関係の皆様、菅原市長、行政機関の皆様、流通関係者の皆様、そして地域の皆様のご尽力により、我々近海かつお・まぐろ漁船も水揚げすることができました。ここに改めてお礼を申し上げる次第であります。我々は本日のシンポジウムが、近海かつお・まぐろ漁船の水揚げが本格化する直前に気仙沼で開催されたことに、大きな意義を感じております。まだまだ大変な状況であると思いますが、本日を契機に、お互いに元気を出し合って、がんばってまいりたいと決意をしております。

最後になりましたが、本日まで参加をされました皆様方の、ますますのご健勝を祈り、さらには気仙沼の発展を祈念して、まことに簡単であります、私の挨拶といたします。今日は本当にありがとうございました。

司会：　ここでご来賓の全ての皆様をご紹介申し上げるところでございますが、時間の都合もございます、まことに失礼ながら、お手元のご来賓出席運営者名簿をご参照いただき、本日のご紹介に代えさせていただきます。皆様、本日のご出席まことにありがとうございます。

続きまして、本日のシンポジウムにあたり、各方面より祝電、メッセージを頂戴いたしております。ここでご紹介申し上げます。

「地域シンポの開催を祝し、心よりお喜び申し上げます。関係各位の並々なぬご尽力に敬意を表し、大会のご成功を祈念申し上げます」商工中金・青木仙台支店長様。

「本日の「食」と「漁」を考える地域シンポジウム開催にあたり、ご尽力いただきました関係者の皆様に心より敬意を表し、感謝申し上げます。本日ご出席の皆様の健勝ご多幸と、当地域の一日も早い復興を祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます」衆議院議員・小野寺五典様。

「本日のシンポジウムのご盛會を心よりお喜び申し上げます。皆様方の今後の益々のご活躍を祈念申し上げます。」宮城県会議員・境恒春様。

以上の皆様より頂戴いたしました。まことにありがとうございました。

さて続きましては、本日のシンポジウムの趣旨説明に移らせていただきます。

本シンポジウムの趣旨説明をコーディネーター、漁業情報サービスセンター・二平章が行います。二平コーディネーターは、北海道大学水産学部を卒業され、茨城県水産試験場に研究員として勤務、その間東京大学海洋研究所研究員、東京水産大学非常勤講師を兼務され、県職員を退職後には、茨城大学地域総合研究所・客員研究員、社団法人漁業情報サービスセンター・技術専門員として、国内の漁港を東奔西走されております。また当地気仙沼には、何度もお越しいただきまして、今回のシンポジウムを企画されました。二平さん、お願いします。



趣旨説明

二平 章

(社団法人 漁業情報サービスセンター 技術専門員
茨城大学地域総合研究所 客員研究員)



今ご紹介いただきました、漁業情報サービスセンターの二平です。私はカツオを長く研究している関係で、毎年、気仙沼を訪れています。まだカツオが姿を見せない 3 月の時期に、毎年カツオの予測の話を依頼されて訪れますが、予測をした後に、6 月頃になるとその結果が出ますので、いつもヒヤヒヤしながら 6 月頃もう一度来ます。予測が外れた時には、頭を丸めてこなくてははいけないと思いながらいつも来るわけです。それでは、コーディネーターを代表して若干の趣旨説明をいたします。

3 月に私が来て、こちらの漁協の 3 階で、今年の予測についてお話をしました。「今年のカツオ船は、3、4 月は苦戦をすと言いました。しかし 5 月、6 月になりますと、7 キロから 10 キロくらいのビンチョウマグロが好漁になるので、竿釣船はそのビンチョウにかかって、これを 5 月、6 月に追い回し、千葉県勝浦中心の水揚げですが、去年以上の豊漁になります。」というお話をしました。そして「カツオは少し遅れ加減ですけれども、春の 1.5 キロから 1.7 キロくらいのカツオが、ちゃんとこれから北上してきますので、心配しないで待っていてください。」というのが、私の予測でした。ビンチョウマグロは、今豊漁です。一日 50 トンくらいの漁獲量です。明日 12 隻が、そのビンチョウマグロを積んで気仙沼にも入ってきます。それから今朝水揚げされたカツオですけれども、1.6~1.7 キロで、今年を中心になるカツオです。ですから今のところ私は頭を丸める必要はないんじゃないかな、と考えております。今日のカツオは銚子前の漁場ですけど、これからどんどん上がってくるサイズですので、期待をして待っていていいと思います。ぜひ気仙沼の皆さんには、また日本一を目指してカツオをたくさん水揚げしていただきたいと思います。

シンポの趣旨ですけれども、私たちコーディネーターで、いろいろ相談した結果、第一には震災から 1 年を経過して、全国からの支援にまず感謝をし、復興に向けて、元気に進んでいる気仙沼をぜひ知っていただきたいということです。

第二には、6 月ですからカツオシーズンが到来し、今年も水揚げ日本一を目指して受け入れするには、「もう水揚げ準備は万全、オーケーです。どんどん皆さん、入って来てください」そういうメッセージを発信したいということです。今日は、シンポジウムを祝う船が入ってくださって、40 トンのおいしそうなカツオの水揚げをしてくれました。

第三には今いろんな所を歩いていると、本当に皆さんが心配をされている問題に、魚の

放射能問題があります。そこで、気仙沼の魚は安心ですよ、放射能の心配はありません、ですから気仙沼のおいしい魚をたくさん食べてくれるように全国へアピールをする、こういう趣旨で今日はいろいろご議論をしていただきたいと思います。と思っています。

本日の内容は、森田さんには放射能問題を、馬場さん、菅原市長さんには、震災復興問題のお話を頂きます。リレートークでは、気仙沼の女性陣 6 名に登場いただいて、いろいろとお話を頂きます。その後、上田さんに応援のメッセージをいただきます。1 部の最後には、気仙沼の未来を担う子供たちに登場していただいて、元気アピールをしていただく、というような内容になっています。

そして、最近この「食」と「漁」を考えるシンポは、話だけじゃなくて、第 2 部として、やはりその地元のお魚を食べる会をするというのが恒例になっています。放射能についても心配なく地元の方々もいっぱいおいしい魚を食べているということ、マスコミの皆さんから全国へ伝えていただいて、気仙沼で水揚げされる魚は安全安心だ、ということを映像で全国の皆さんに確信をしていただきたいと思います。これには気仙沼の食の達人の皆さんに大変ご協力をいただき、裏方として第 2 部の準備をやっていただいています。

今回の企画は、気仙沼漁協の村田次男さん、熊谷成一さんと一緒に進めました。そして気仙沼の方々はもちろん、気仙沼以外のたくさんの方々のご協力も頂きました。改めてご協力いただいた方々に感謝をしたいと思います。今日半日ですけれども、シンポジウム、と第 2 部、交流会が気仙沼の復興に向けた一助になりますことを皆さんと共に願っております。よろしくお願いいたします。



第1部 シンポジウム一報告一

魚と放射能のはなし

森田 貴己

(水産庁増殖推進部)



今ご紹介いただきました森田と申します。よろしくお願いします。今水産庁の増殖推進部という所に所属していますが、もともと水産総合研究センターの海洋放射能研究室で、17年ぐらい水産物と放射能の汚染等の調査研究をしていました。たまたま震災1年前から水産庁へ出向していたのですが、このような事故を受け、水産庁で放射能問題を担当させていただいております。

水産研究所は、第五福竜丸事件から放射能調査を行っています。また、アメリカとソ連が大気圏の核実験を頻繁に行っていたから、その頃の日本の水産物にも少し汚染が出ていたということで、調査をしていました。今でも続いています。アメリカの原子力潜水艦が横須賀と佐世保、沖縄に寄港しますので、その寄港時の調査や、チェルノブイリ事故に対応して、水産研究所はこれまで調査研究をしてきました。

私自身は、以前、ソ連・ロシアによる日本海への放射性核廃棄物の投棄調査や、米国による鳥島等でのウラン弾使用調査、また1999年の東海村・JCOの臨界事故の調査などに携わってきました。

水産研究所における主な放射能調査



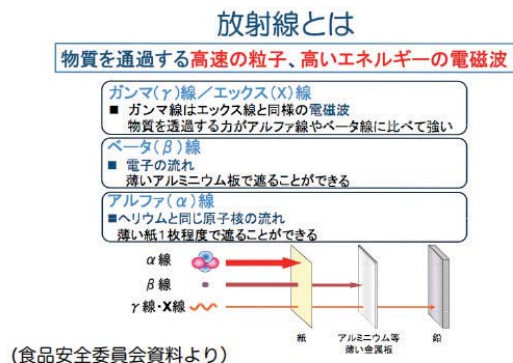
- 1954年 第5福竜丸被爆をうけて、調査開始
- 1950年～ 米ソ大気圏内核実験増加をうけて、調査を強化
- 1960年～ 米国原子力潜水艦寄港に対して調査開始
- 1975年～ 深海への低レベル放射性廃棄物投棄予備調査開始
- 1986年 チェルノブイリ事故対応調査
- 1993年 旧ソ連日本海への放射性廃棄物海洋投棄に対して、IAEA、韓国、ロシアと国際共同調査
- 1997年 米国の劣化ウラン弾影響調査
- 1999年 東海村JCO臨海事故対応

調査対象魚種

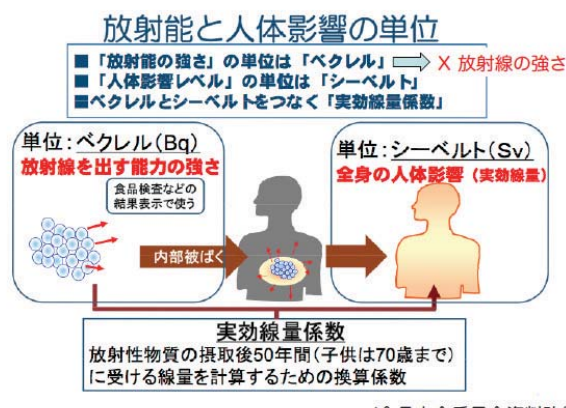


水産研究所は、今の福島原発事故の以前から調査を何十年もやってまして、通常はここに挙げたような日本周辺の主要な水産物を定期的に毎年モニタリングしています。そのため、今回福島原発で新たに汚染が生じたものがどの程度影響が出たとか、日本海とか東シナ海の方まで汚染が拡大したかどうかというのは、正確に把握できるといっていいと思います。

少し、放射能に関して基礎的な説明をしておきます。放射線には 3 種類、ガンマ線とベータ線、アルファ線があります。今心配されている放射性セシウムは、ガンマ線を出す放射性元素です。アルファ線やベータ線は、紙やアルミの薄い膜があれば防御できますが、ガンマ線はこういった物を通過してくるために、外部被ばくとして人体に影響があると恐れられているということです。



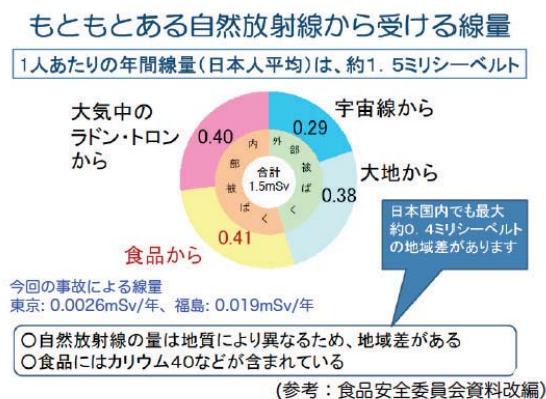
ベクレルとシーベルトという、2 つの単位が使われていて分かりにくいといわれています。食品衛生安全委員会の資料から、1 ベクレルは、1 秒間に 1 本放射能が出るという単位です。ですから 100 ベクレルだと 1 秒間に 100 本放射能が出る。これがベクレルという単位です。シーベルトは、人体に及ぼす影響の話です。例えば野球のピッチャーで考えると、小学生とプロ野球選手では、デッドボール



で与える痛さは全然違います。ボール 1 球自体はベクレルですが、人にどれくらい影響を及ぼしているかを表すのがシーベルトという単位です。今は実際の魚を食べた後ではなく、魚を出荷する時に値を測っているの、通常はベクレルという単位で計算されています。

今、放射能がいろいろと問題になっていますが、そもそも核融合が起こった結果、地球ができていますから、地球にはもともと自然放射線というのがあります。天然の放射性元素ともいわれ、例えばラドン温泉はお湯の中にこういう放射性元素、放射能が溶け込んでいます。自然放射線として、こういうものもあるということです。

天然放射性元素の中にはカリウム 40 というものが含まれています。今回の事故がなくても、普通に食べ物を食べているだけで、食品から 0.41 ミリシーベルト被曝してしまうというのが、普通の、通常の状態です。それで実際、事故が起きて、どのくらいその日本の食べ物が被曝かつ食品が汚染されて、増加したか。東京で去年 1 月のデータを年間に延ばしてみると、0.0026 ミリシーベルトしか増



加していません。福島県では、0.091 ミリシーベルトの増加です。これは特に福島県の場合、海面漁業を全部自粛していますし、かなり高い濃度で汚染された食べ物は市場に流通していないので、事故によって新たに被曝することが抑えられているということです。ですから、わずかこれだけの量です。

日本の場合、花崗岩があるので、地面の上に立っているだけでも大地から被曝します。日本の国土は広いので、地域差もあります。土地から受ける放射能が高い地域は東海地方、特に岐阜県で、関東地方は低いのですが、その差だけでも 0.4 ミリシーベルトあります。そういう地域差も考慮すると、現在あるものからの汚染というのは、ほとんど心配する必要はありません。

地球の誕生とともにできたカリウム 40 が、どのくらい普通の食べ物に含まれているかというと、魚だと 1 キログラム当たり 100 ベクレル、米だと 30 ベクレルくらい、含まれています。日々の普通の食事でも被曝するということです。ですから、体重 60 キロ程度の人で、おおよそ 7,000～8,000 ベクレルの放射能を持っています。少し太っている人は、もう少し大きい値でしょう。放射能というとかかなり心配してしまうのですが、数千ベクレル程度はもともと存在して、人間も体内に持っているので、いたずらに心配するようなものではありません。

ここから今回の事故に関連する話をしたいと思います。福島原発の事故で大量に環境中に放出された放射性元素は、ヨウ素とセシウムです。ヨウ素は、喉にある甲状腺にたまっていく傾向があります。人間の場合、甲状腺で甲状腺ホルモンを作るのにヨウ素が必要で、自然に甲状腺にたまっていきます。放射性ヨウ素も甲状腺に集まってしまいますから、事故直後、多くの方が甲状腺がんを心配しました。ただヨウ素の場合、半減期が 8 日しかありません。福島県の久之浜のアカモクという海藻のデータを見ると、震災後の 6 月 2 日時点

食品には、どれくらいカリウム40が含まれているの？



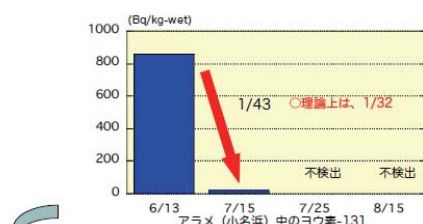
体内には、どれくらい天然の放射性物質存在するの？

日本人男性(体重約63kg)の場合		(Bq/人)
カリウム40	約4,000	
炭素14	約3,600	
その他	約 300	
合計	約7,900	

(農林水産省資料より)

海藻中のヨウ素-131

○福島県久ノ浜港のアカモクから、6月2日時点で3000(Bq/kg-wet) のヨウ素-131が検出されていた。



○ヨウ素-131の半減期は約8日のため、既に検出限界値未満。

(データは、水産庁HPより)

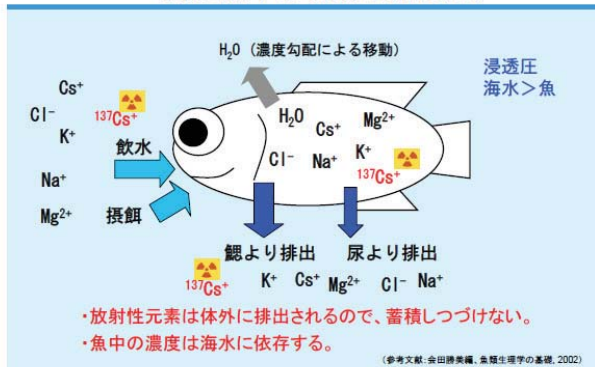
点で約 3,000 ベクレル検出されましたが、ひと月経った後に計測すると、不検出になっていました。これは、ヨウ素の半減期が 8 日なので、急速になくなったわけです。ですから現在は、ほとんど放射性ヨウ素が検出されることはありません。

現在、問題になっているのがセシウムです。セシウム 137 とセシウム 134

ではなぜこのような汚染物質と放射性セシウムで濃縮に違いが出るのか、疑問の生じる

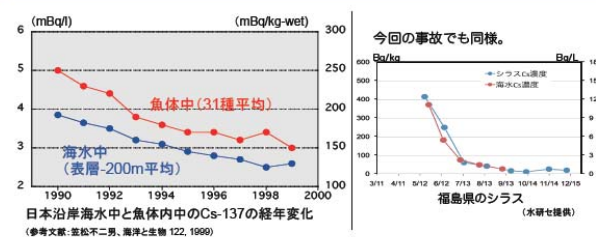
参考文献:
山本登福、生物濃縮、1978
笠松不二男、Radioisotopes 48, 1999

海産魚中の塩類の流れ(1)

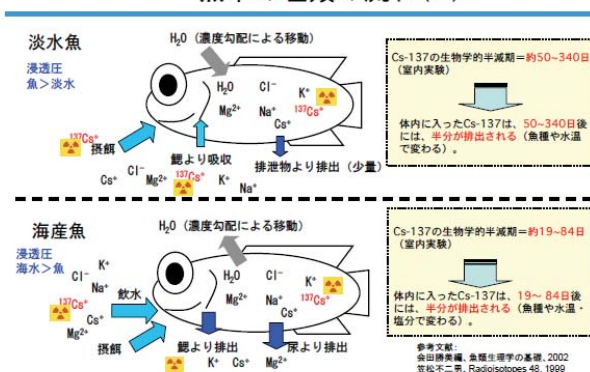


ので、海の魚はかなりしょっぱいのですが、結構な量の海水を飲んでいますが、海水を飲んで、外に出ていってしまう水を補うということを生理的にやっています。ただ海水を飲むと、同時にこういった塩分、ナトリウムやカリウムなどと一緒にセシウムも飲んでしまうのですが、塩分過多の状態になって、これはこれで体に悪い状態になるので、強制的に塩分を排出するメカニズムになっています。魚はたくさん海水を飲むのと同時に、どんどん塩分を排出しているので、先ほどの農薬のように食物連鎖を通じて濃度が上がっていかない、ということです。排出という過程があるということです。

海水中と海産魚中のCs-137の関係



魚中の塩類の流れ(2)



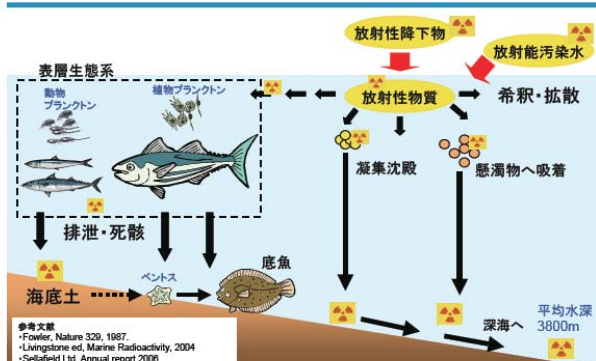
昨年度に福島県の子供たちの尿から放射性セシウムが検出されたという話がありました。これも海水中の魚と同じように、一度体内に取り込んでしまったのですが、尿として排出されたということです。取り込んでしまったということは非常に問題なのですが、体から排出された。

魚の濃度は、餌も関係しますが、かなり海水に依存します。福島原発事故前のデータで、昔の核実験の影響で放射性セシウムがあった海水をみると、海水中のパーセンテージがどんどん下がってくると、それにつられて魚の濃度もどんどん下がってきます。今回の事故でも、福島県のシラスの濃度は、海水中の濃度が減少していくと、それに

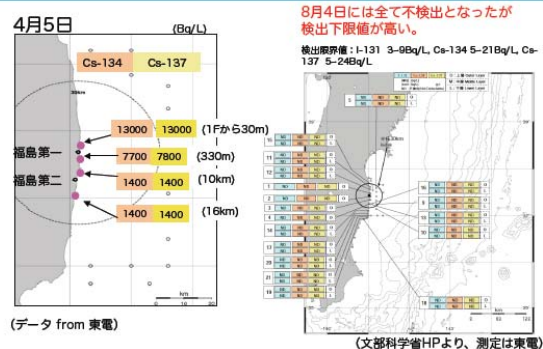
伴ってどんどん下がっています。つまり、魚の濃度、特に浮き魚の場合は、ほぼ海水中の濃度に依存しています。

ざっくり言うと、海を支える元素は、よく深海の映像でマリンスノーという白い物質が海の底に落ちていくのを見たことがおありかと思いますが、そういうものに吸着したりして、かなりの量が海底に落ちていきます。同時に、海の希釈や拡散で、また薄まっていきます。少し海の中に残ったものが生態系の中を循環して、海水中の魚を汚染していくということです。生き物は排泄のメカニズムを持っていますし、寿命の短い魚が沈んでいくことで、現在大部分の放射性元素というのが海底に蓄積している状態です。

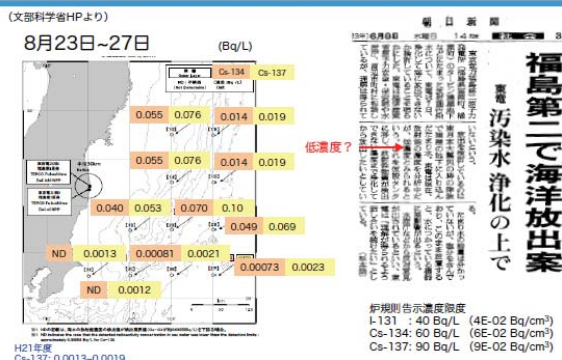
海洋中での放射性物質の動き



海水中の放射性物質の濃度(1)



海水中の放射性物質の濃度(2)



宮城県のデータを見ると、もう一つ桁が下がるくらいまで、汚染濃度は小さくなっています。ですから、海水の状態は、約1年経って、除々に戻りつつあるということです。

魚の濃度がどうなっているかという、事故直後、表層のイカナゴやシラスなどからものすごく高い濃度が検出されました。ただこれは、海水がきれいになっていったおかげで、

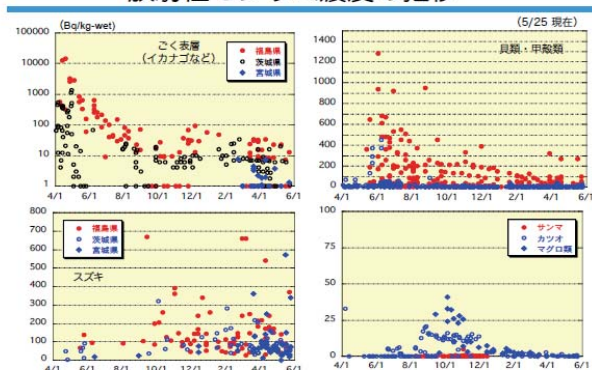
数カ月で一気に濃度が下がり、現在は十数ベクレや不検出のレベルにまで下がっています。貝類や甲殻類も同様で、去年の6月に1,000ベクレルを超えるようなものがありましたが、それもどんどん下がっています。宮城県の場合は、汚染が福島ほど深刻じゃない、というより、ほとんどなかったの、ほとんどゼロの所が多い。

今、少し問題になっているのがスズキ

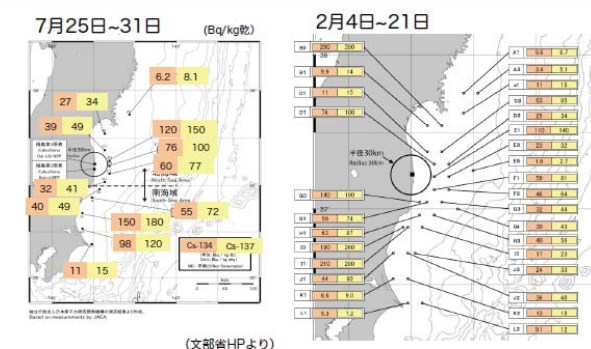
です。スズキの場合、沿岸性で魚を結構食べるので、以前から汚染が長引くことで知られていた魚種です。宮城県の場合は、今年6月の時点でもまだ500ベクレルを超える値が検出されています。当然今基準値が100ベクレルなので、スズキは出荷制限されています。日本全体のデータから、サンマやカツオ、マグロをみてみます。サンマやカツオはかなり遠方から泳いできます。サンマは去年も全く検出されないままでした。カツオも数十ベクレルまではいったん上がったのですが、それ以上の数値はなく、その後不検出の状態になっています。唯一マグロだけ、福島県沖で約40ベクレルまで上がりましたが、これはそのまま下がっていききました。

先日、カリフォルニア・サンディエゴで獲れたマグロが汚染されている、というニュースが報道されました。少し情報が間違っていて、濃度が約10ベクレルと報道されましたけど、この値は乾燥させて水分を抜いた状態での数値です。乾燥させた状態で10ベクレルというと、日本で生の状態でのデータに直すと、おおよそ2ベクレルです。去年の段階から、小型のマグロ、2歳魚ぐらいがカリフォルニアに行くことがわかっていました。ですから、積極的に日本沿岸でカリフォルニアに渡っていきそうなマグロを捕まえてデータを測定しました。今回のアメリカの発表も、日本のこういう数字を引用してもらって、同じような数値だったそうで、特に問題視されてないということです。

放射性セシウム濃度の推移



海底土の放射性物質の濃度 (1)



海水がきれいになるというのは、拡散していくということもあるのですが、結局どこへ行ったのかというと、大部分が海底の泥にたまっているということです。去年の7月のデータで、仙台湾でも数百ベクレルを超えるような海底の汚染が見られます。原発近くの海底土の濃度は160万ベクレルありますから、放射性物質の多くは原発から流れ出した時に、近くの海底に

海底土の放射性セシウム濃度（２）

福島県 四ツ倉沖		(Bq/kg乾)							
水深	約 0.5 km	約 1.2 km	約 2.6 km	約 3.7 km	約 6.5 km	約 10 km	約 13.6 km	約 20.2 km	
採取年月日	7 m	10 m	20 m	30 m	50 m	75 m	100 m	125 m	
2011.5.26	1503	6003	9271	-	-	-	-	-	
2011.7.14	815	1527	2386	462	663	347	183	N.D.	
2011.7.26	124	1586	905	-	-	-	-	-	
2011.8.23	625	933	992	1227	1734	851	235	306	
2011.9.12	1142	687	943	8189	679	470	272	136	
2011.10.3	88	804	664	2916	1593	395	647	3571	
2011.11.1	213	465	785	794	523	496	89	72	
2011.12.2	558	441	562	820	1123	-	-	-	
2012.1.13	246	554	297	518	1208	278	307	80	

(データ from 福島県水産試験場)



高い濃度の海底土は徐々に深海へ移動

沈降していったということです。沈降しきれなかったものが、拡散して現在の汚染につながっています。

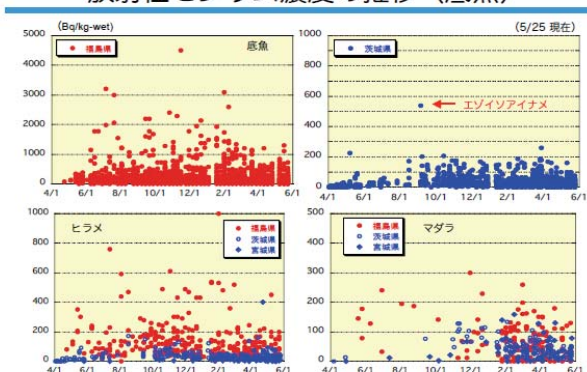
ただ海底部の汚染が今後永遠に続くのかというと、そういうわけではありません。福島県の水産試験場で公表されているデータを見ると、福島県四倉沖から沖に向かって調査点を設定しています。去年の 5 月 26 日時点では、一番浅く沿岸に近い所は 1,500 ベクレル、また水深 10 メートル地点では 6,000 ベクレルと、非常に汚染されていましたが、時間が経過するにつれて濃度がどんどん下がっています。これはなくなってしまったわけではなく、どこに行ったかという、じわじわと沖の方に移動して行ったということです。深層に流れがあり、どんどん沖の方に追いやられていきます。沖へ動いて行くにつれて、泥の中でも広がっていくので、そこでの濃度は少しずつ下がります。陸上でホットスポットと言われる所のように、ある 1 か所にずっととどまり続けるのではなく、じわじわと海の底で拡散しながら沖の方にいくので、濃度自体も薄まるということです。

実際は、濃度が薄まっていくと同時に、上に新しく堆積物が少しずつたまっていきます。つまり、汚染された上に堆積物がのって、封じ込めていくという作業が海の中で起こっています。日本沿岸で海底土をかなり深い所、何十センチかまで掘ると、以前核実験が行われた時の放射性元素がでてきます。今後は上に新しく堆積していくので、放射性物質は地中にどんどん入っていくと考えられます。

そうすると、魚に影響がでてくるのではないかという話です。底魚の生活環境である海底土に汚染がありますから、福島県の底魚を調べると、10 月時点で一度、きわめて高濃度の、4,000 ベクレルを超えるようなものが見つかりました。まだ時々、1,000 ベクレルを超えるものも出ているという状態です。ただ、非常に高い値は最近出ていませんし、減少傾向にあるというのは確かです。減少のスピードは浮魚に比べると少し遅いのですが、底魚も確実に汚染は収まりつつあるといえます。

少し深刻な問題がヒラメとマダラです。100 ベクレルに基準が下がったので、以前なら問題なかったのですが、宮城県で基準値を超えるものが出てきて、今出荷規制となっています。

放射性セシウム濃度の推移（底魚）



結論として、放射性セシウムは、水銀や有機塩素、DDT、PCBなどのように、食物連鎖を通じて高濃度に濃縮されるということは化学的でないです。また、体外に排出されていくので、どんどん上がっていくものでもありません。ですから、例えば数年後に大型魚のかなり大きいマグロやカツオから、数千ベクレルとか数万ベクレルの放射性セシウムが見つかるので

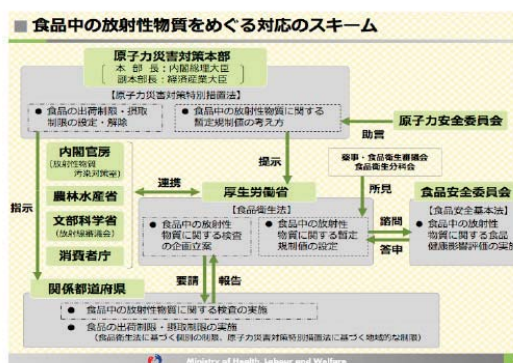
魚の中の放射性元素は、魚の中に入ってくる量と出ていく量の差で決まっているので、浮魚の場合は入ってくる主要な原因である海水中の濃度が下がったので、どんどん濃度が下がっていきます。ただ底魚の場合、汚染が海底うのが依然としてあるために、現在もの汚染も減少しているので、確実に汚

放射能検査結果

各都道府県等における水産物放射性物質調査結果

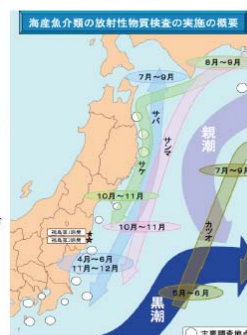
各都道府県における水産物放射性物質調査結果									
①(調査対象県: 徳島、高松、愛媛) 放射性セシウム 500Bq/kg 放射性ヨウ素 2,000Bq/kg									
▼をクリックするとデータの抽出を行なうことができます。									
		検査結果							
		セリウム		ヨウ素		合計			
No.	検査品名	検査品名	検査値	検査品名	検査値	検査品名	検査値	検査品名	検査値
1	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
2	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
3	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
4	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
5	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
6	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
7	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
8	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
9	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
10	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
11	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
12	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
13	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
14	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
15	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
16	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
17	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
18	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
19	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
20	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
21	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
22	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
23	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
24	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
25	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
26	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
27	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
28	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
29	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
30	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
31	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
32	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
33	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
34	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
35	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
36	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
37	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
38	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
39	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0
40	アサギ	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0	アサギ	0.0

繼續中



検査の基本方針概要

- 汚染性種種の検査
主要水源地において原則週1回
- 操業再開の際に検査を実施し、分析の結果を踏まえ、操業再開を判断。
- 広域回遊性魚種
検査は関係界界団体及び水源地などとの連携と協力で行う。
- 暫定規制値を超える検査結果が得られた場合は、サンプリングに際しては、①付着した、②連続経度定期規制値を下回った場合に検査を再開（予定）
- 詳しいことは、下記HPを御覧下さい
<http://www.fva.maff.go.jp/press/cisaw/110506.html>



第1部 シンポジウム一報告一

東日本大震災と復興問題

馬場 治

(国立大学法人 東京海洋大学 教授)



ご紹介いただきました馬場と申します。気仙沼にはずいぶん昔からお世話になっております。専門が漁業経営や水産物流通ですので、最初の頃はマグロ船やサンマ船の経営調査、あるいはカツオ、サンマの流通調査でお伺いしていました。震災後は気仙沼市の復興委員として、いろいろな検討に携わらせていただきました。本日は水産業の復興状況と課題についてお話しさせていただきます。よろしくお願いします。

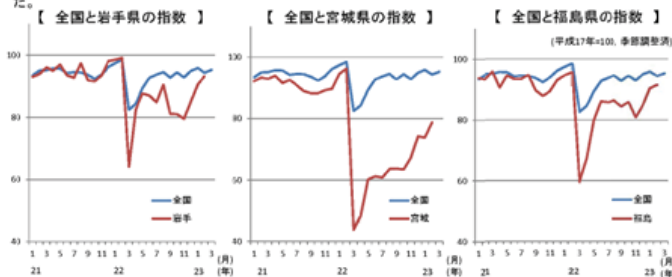
つい先日、復興庁から「復興の現状と取組」が報告され、ホームページに掲載されました。被災から今日に至るまでの動きが書かれています。まず、この復興庁の報告から、簡単に説明いたします。

鉱工業生産指数という、さまざまな生産製造業の生産状況を示した指数で、岩手県と宮城県、福島県をみると、宮城県はなかなか立ち上がりが遅いです。これは、被災のレベルが非常に高いということです。特に岩手県や福島県に比べ、沿岸部に水産設備が立地し、そこでの被害が大きいものですから、なかなか立ち上がることが難しい。宮城県の復興が遅いと耳にしますが、それは行政の怠慢ではなく、製造業が沿海部に大きく立地していたということです。

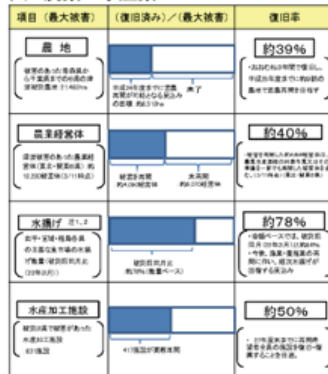


(2) 県別の鉱工業生産指数の変化

経済産業省及び各県発表の鉱工業生産指数によると、平成24年2月分の指数は全国は94.4(被災前:98.5)、岩手県は93.3(被災前:99.1)、宮城県は78.8(被災前:96.3)、福島県は91.5(被災前:95.7)となった。



(3) 農業・水産業



(4) 観光業



復興序

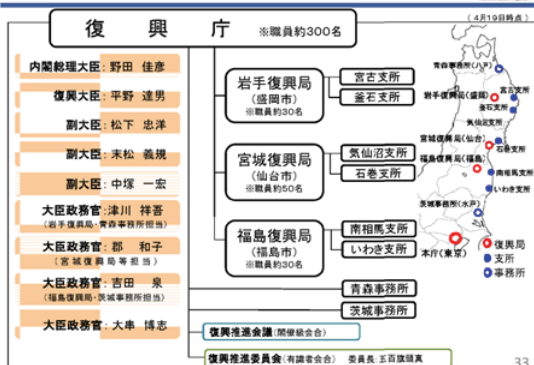
グループ補助会の実績 (6月17日現在)				仮設店舗・工場等の整備実績 (6月11日現在)			
	国費＋県費	グループ数	企業数		要整備戸数	延べ床面積	基本契約締結箇所数
青森県	86億円	10グループ	206者	青森県	18	7,290㎡	18
岩手県	437億円	30グループ	293者	岩手県	339	115,251㎡	265
宮城県	1,196億円	65グループ	1,192者	宮城県	140	61,501㎡	105
福島県	389億円	80グループ	1,071者	福島県	46	32,510㎡	43
茨城県	81億円	12グループ	474者	茨城県	1	180㎡	1
千葉県	14億円	1グループ	49者	長野県	1	2,444㎡	1
合計	2,202億円	198グループ	3,289者	合計	545	216,976㎡	433

復興片

項目	被害状況	進捗状況(%)					今後の取組
		0	20	40	60	100	
漁船	約2万3千平方メートルの漁船の被災	70% (8.411億5千円)	被害 3,696億円 支援 2,898億円 低減 135億円	24年度末までに、漁船被災等による自力復旧を目的とした中身の復旧を目標とする。	 カツオの水揚げ(気仙沼漁港)		
水揚げ	被害・支援・低減金額の多い漁市場の水揚げ(24年度)	水揚げ率78% (17千トン)	被害 75% (75千トン) 支援 84% (74千トン) 低減 0% (0千トン)	24年度末までに少なくとも1万2千トン程度の水揚げ。			
	被災直前(前月比22年8月)	水揚げ金額64% (22億円)	被害 72% (5.8億円) 支援 90% (6.5億円) 低減 0% (0億円)	今後、漁業の復旧をいかに迅速に実現が可能な事を検討。			
加工流通施設	被災市場で被害があった水産加工施設(6施設)	65%(被災3施設) (22施設が全壊再建)	被害 92% (12施設) 支援 100% (9施設) 低減 8% (1施設)	千手巻と宮城県の産物市場は、22年度までに22施設すべてが24年度に再開復旧を予定。			
	被災市場で被害があった水産加工施設(6施設)	50%(被災3施設) (4.17施設が全壊再建)	被害 56% (125施設) 支援 45% (233施設) 低減 60% (69施設)	24年度末までに再開復旧希望の施設を調査し、復旧費用を支援するを目標。	 機橋の架上げ(気仙沼漁港) 施工前 地盤沈下による止水 施工後 機橋の架上げ(1-Gro)復旧		

長あるいは委員を見ると、一部は 4 月に発足しました復興構想会議のメンバーが入っています。このメンバーは岩手県、宮城県、福島県の知事を除いては大幅に入れ替わっていて、より産業復興に寄った委員の構成になっています。

 復興片



復興序

議長 長
野田 佳彦 内閣総理大臣
副議長 長
平野 達男 復興大臣
議員
議長及び副議長以外の全ての閣僚大臣
内閣官房副長官
松下 忠洋 復興副大臣
末松 義規 復興副大臣
中塚 一宏 復興副大臣
柳澤 光典 経済産業副大臣
津川 祥秀 復興大臣政務官
都 和子 復興大臣政務官
吉田 泉 復興大臣政務官
大串 博志 復興大臣政務官
浜田 幸三 外務大臣政務官

委員長:	五旗直樹 氏	公立大学法人熊本県立大学理事長、公益財団法人ひびく文化記念21世紀研究機構理事長
委員長代理:	西園 貴子 氏	東京大学客員教授
委員:	飯島 潤 氏	政策研究大学院大学教授
	牛尾 陽子 氏	公益財団法人日本活性化センター・アドバイザー
	大井 祐治 氏	公益財団法人公益文化会理事長
	清水 行夫 氏	公益財団法人再興財団基金・希望の火文化財理事
	清原 桂子 氏	公益財団法人ひびく文化記念21世紀研究機構副理事長
	佐藤 雄平 氏	福島県理事
	夏川 孝志 氏	富士宮市立大学大学院環境研究科教授
	山本 孝子 氏	公益財団法人公益文化会理事
	星 光一郎 氏	公益財団法人福祉財団理事
	堀江 浩一 氏	弁護士、公益財団法人さわやか福祉財団理事長
	村井 嘉浩 氏	宮城県理事
	仙石 昭司 氏	公益財団法人理事
	山田 文子 氏	熊本市立大学国際行政事務課事務代表取締役社長

特区制度にはいろいろな制度ができていて、主には規制手続きの特例であるとか、税制上の特例、そして土地利用。特にこの土地利用の再編特例は大きい課題です。土地利用の問題は、集団移転や区画整理指導で、特区で再生に取り組んでいるという事例です。

復興特区制度①

(1) 復興特区制度の概要

- 地方公共団体が作成する復興計画に基づき、規制・手続の特例、税・財政・金融上の特例、土地利用再編の特例を適用。
- 地域の提案に基づき「国と地方の協議会」の協議を経て、新たな特例等を追加・拡充。

特例措置

規制・手続等の特例

- 公営住宅の入居基準の緩和
- 農林水産物加工・販売施設、バイオマスエネルギー施設等の設置の簡便化の特例

税制上の特例

- 特別徴収・税額控除
- 被災者向けに対する給付金等支給額の10%の税額控除
- 新規立地新設企業を5年間無税

財政・金融上の特例

- 復興交付金
- 利子補給金

土地利用再編の特例

- 既存の土地利用計画（都市、農地、森林等）の特例をみ
- 超えて迅速な土地利用再編を行う特例措置
- 津波避難建物の移転手続の特例

対象区域

復興特区制度②

① 復興特区制度の概要

- 規制・手続、税制上の特例措置等を内容とする復興推進計画の申請、認定が進んでいるところ。
- 土地利用再編のための特例措置等を講ずる復興整備計画についても、認定、公表が進んでいるところ。

② 復興推進計画

これまでに、以下のとおり、14件の復興推進計画について認定を行ったところ。（次頁参照）

(1) 青森県、岩手県、宮城県、福島県、茨城県の5県について、製造業、サービス業等を対象とした「**税制上の特例**（機械設置の即時償却、新規立地企業の5年間無税等）を含む計5計画

(2) 岩手県、宮城県、福島県の3県について、医療技術者の資格、医師の配置基準、特別老人ホーム等の施設や薬局に係る設備・運営基準に関する**規制の特例**を含む計4計画を認定。

(3) その他、個別の市町村が作成した**金融上の特例**（利子補給金）を含む計画や農業振興のための**税制上の特例**や**規制の特例**を含む計5計画を認定。

③ 復興整備計画（既存の土地利用計画の特例を超過して、手続きのワンストップ処理等の特例措置を創設）

岩手県で4市町村（大船渡市、陸前高田市、山田町及び野田村）、宮城県で5市町村（石巻市、名取市、岩沼市、山元町及び女川町）で復興整備協議会が組織され復興整備計画が公表された。この協議会には、復興局長が構成員となり、復興局は市町村、県、各省の調整が円滑に行われるよう支援。

復興特区制度③

(参考) 復興推進計画の認定状況

認定日	対象区域	特例措置
3月2日	青森県・4市町村	製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 土地取得税等に基づき（国、地方）の特例 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方）
3月9日	岩手県・3市町村	製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方）
3月9日	宮城県・3市町村	製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方）
3月9日	福島県・3市町村	製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方）
3月9日	茨城県・3市町村	製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方） 製造業・建設業の税制上の特例（国、地方）

復興特区制度④

(参考) 復興整備計画の公表状況

地域	地区名	事業	公表日
大船渡市	門之浜地区、小瀬地区、田沢地区、崎地区	集団移転促進事業	3月30日
	長瀬地区	集団移転促進事業	3月30日
陸前高田市	今泉地区	土地地区整理事業	3月30日
	高田地区、高田東地区、高田西地区	都市施設の整備に関する事業（津波復興拠点事業）	3月30日
山田町	磯宮地区	集団移転促進事業	3月30日
	城内地区	集団移転促進事業	3月30日
野田村	米田・南沢地区、泉沢地区	集団移転促進事業	3月30日
	新松田地区	都市施設の整備に関する事業（都市公園事業）	3月30日
石巻市	新松田地区、小室地区	集団移転促進事業	3月30日
	松浜地区、竹沢地区、小瀬地区、清水田地区、松浜地区、十八成沢地区、松浜地区、新松田地区、名取地区、船橋前浜地区、泉沢・大瀬地区、小瀬地区	集団移転促進事業	4月27日
名取市	関上地区	土地地区整理事業	3月30日
	玉澤地区、三軒茶屋地区	都市施設の整備に関する事業（都市計画道路事業）	3月30日
岩沼市	玉澤地区	集団移転促進事業	3月30日
	山元町	災害公営住宅整備事業	3月30日
女川町	山下地区	災害公営住宅整備事業	3月30日
	荒神沢地区	土地地区整理事業	3月30日

復興整備計画（土地利用再編の特例）

既存の土地利用計画（都市、農地、森林等）の特例を超過して、迅速な土地利用再編を行う特例措置を創設し、地域の実情に応じた復興まちづくりを速やかに実現

事業に必要な許可の特例・手続のワンストップ処理

現状と課題

① 事業実施のために必要な許可が得られない（市街化調整区域における開発許可、農地転用の許可等）

② 事業実施のために複数の許可が必要（開発許可、農地転用の許可等）

計画に基づく事業の実施

- 市街化調整区域における開発行為、農地転用等について特例的に許可
- 開発許可、農地転用の許可等、事業に必要な複数の許可手続をワンストップで処理
- 都市計画や農用地利用計画等の決定・変更手続についても、ワンストップで処理

現状と課題

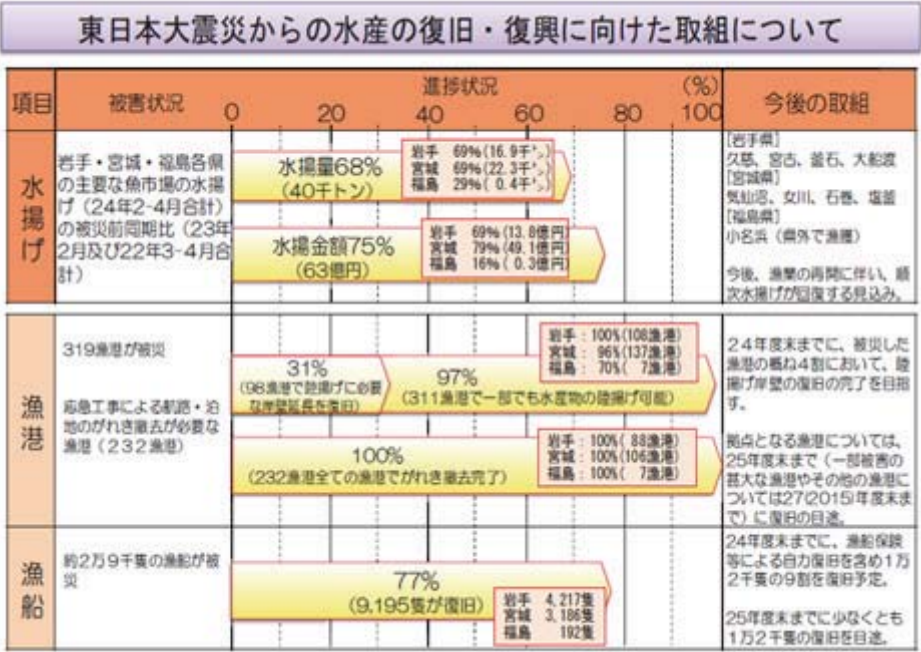
③ 住宅地と農地が混在するなど、被災地の実情に即した事業手法が必要

計画に基づく事業の実施

- 住宅地と農地を一体的に交換・整備する事業
- 市街化調整区域内でも土地地区整理事業を実施可能に
- 防災集団移転促進事業について、住宅用地のみならず、医療施設等についても国費負担対象に

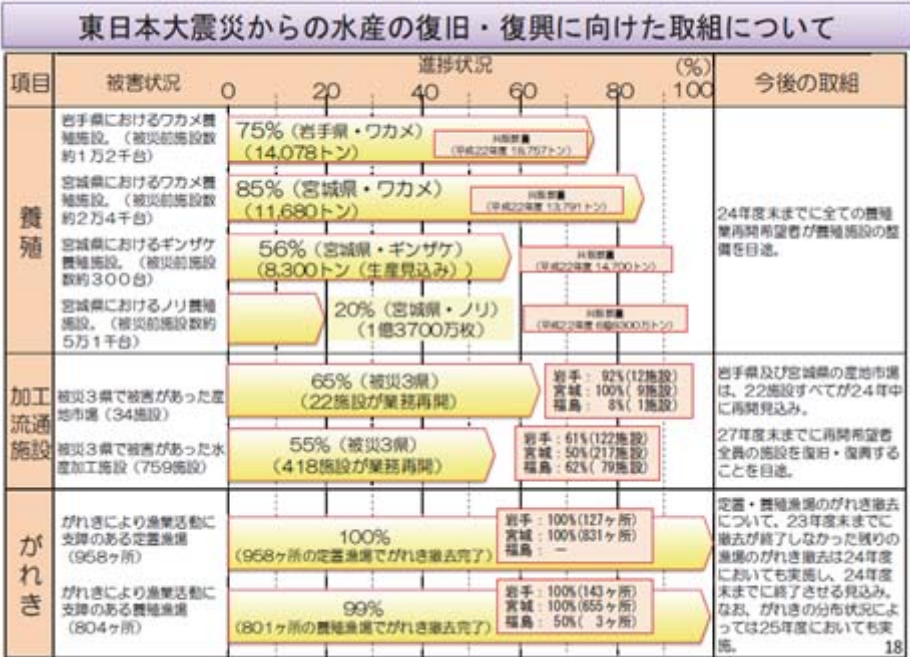
土地利用再編のイメージ

次に、水産庁が定期的に更新している資料で、6月に出されたものから、水産関係のお話をします。復旧復興対策、皆さんもよくご存じかと思いますが、漁業・養殖業の経営再開に対する支援や、加工流通業、また漁港・漁村について、それぞれ、さまざまな事業が含まれています。全て水産庁のページに掲載されています。

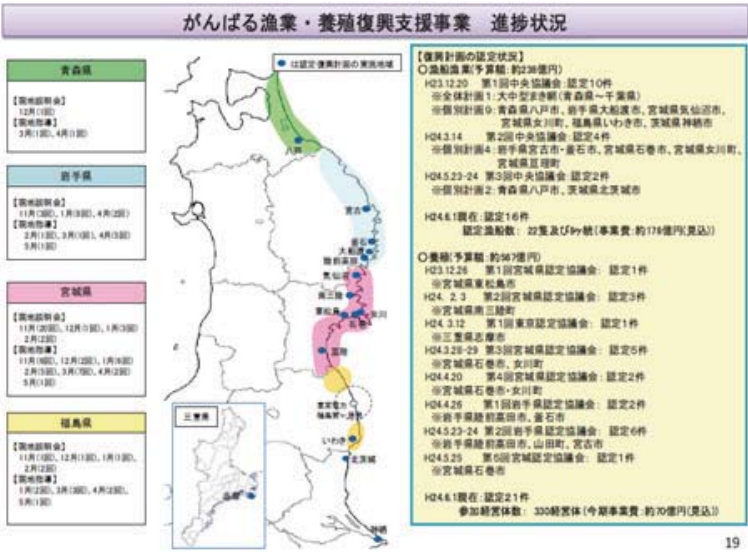


岩手県と宮城県、福島県の主要市場での水揚げについて、2012年2月から4月の統計を、

昨年度と一昨年度で比較してみます。福島県は自粛していますから、まだまだ水揚げがありません。岩手県と宮城県は 7 割近くまで戻っていますが、これはかなりの部分が外来船によるカツオやサンマ船の水揚げです。港湾や市場の設備が整えば入って来られるという状態です。流通を考えるとすぐには小型の船は無理という事情もあって、比較的、思ったよりは立ち上がりがいいと思います。漁港も同じように、かなり復旧したといっていますが、それも一部が使える状態になっているということであって、漁港で陸揚げに必要な岸壁延長の復旧というのはまだまだです。だいたい従来レベルで使える状態、とりあえず使える、と見てください。



養殖業はワカメを中心に、比較的思った以上に、と言っていいのでしょうか、早く復活、復旧はできています。気仙沼も加工流通が投資も大きい分、まだ 50～60 パーセントにとどまっています。なかなか再建が進んでいません。しかもフル稼働ではありませんので、実際はもう少し、実数では小さいと思いま



す。

現在進められているがんばる漁業、養殖業の進捗状況は、2012年6月1日現在で、認定が21件あります。まだ認定途中のものもあります。

現在復興がどういう状況にあって、今後どうなるのかという各府省の行程表から、水産業関連のものだけ抜き出してみました。文科省関連では、東北マリンサイエンス拠点の構築。どちらかと言うと、我々研究者サイドが使うようなものですが、このような事業ものっています。

農林水産省では漁船の復旧、復興です。共同利用漁船の支援対策やがんばる漁業、こういう事業で約40億円と100億円が復興特別会計で用意されています。水産加工流通業の復興に関しては、農林水産省では民間の流通業者の方が実際に使えるものがなかなかない、使いづらいということが言われています。農林水産省関連では市場生産体制の再構築もありますが、サケなどの種苗放流の問題を抱えています。

岩手県の特区に関してはまだ認定が出ていませんが、今後出て来る可能性はないのではないかと思います。

国交省の管轄では造船業の復興として、三次補正で地域造船産業集積高度化事業があります。おそらく気仙沼にも関係するものがあるはずです。

主要な港、特三から三種漁港について、水産庁のデータをまとめました。昨年4月から今年2月までの水揚げ状況です。

今後の行程ですが、27年度末を目指して漁港施設全般が使えるように、さらに高度衛生管理荷さばき所が8割は供用目前でしたので、もうすぐ完成させるということです。大船渡も整備途中でしたので、25年度中にはやる。気仙沼も含めておおよそ27年度までに衛生管理荷さばき所を整備するという方向で動く、と書いてあります。

県別に中小機構の仮施設として、現在建設中あるいは完成し

漁港の復興状況と今後の予定

	昨年4月～2月水揚げ		陸揚げ岸壁・荷捌き所	優先着手	漁港施設全般	高度衛生管理荷捌き所	備考
	水揚げ量(トン)	主要魚種					
八戸(特3)	107,000	サバ、イカ等			24年8月	24年10月	供用目前
釜石(3種)	7,400	サケ	25年度末		27年度末	検討	
大船渡(3種)	26,000	サンマ	25年度末		27年度末	25年度	整備途上
気仙沼(特3)	26,000	カツオ	25年度末	嵩上げ	27年度末	25～27年度	
女川(3種)	20,000	サンマ	25年度末	嵩上げ	27年度末	25～27年度	
石巻(特3)	23,000	イカ、タラ類	25年度末	嵩上げ	27年度末	25～27年度	
塩釜(特3)	22,000	マグロ類	25年度末	嵩上げ	27年度末	25～27年度	
鮎子(特3)	223,000	サバ、イワシ			24年度末	25～26年度	

仮施設整備状況(24年3月末時点)

	建設中			完成				
	案件数	区画数	面積(m ²)	案件数	区画数	面積(m ²)	1件あたり面積(m ²)	1区画あたり面積(m ²)
青森県	2	4	472	25	119	6,818	273	57
岩手県	59	366	21,310	154	829	56,609	368	68
宮城県	15	79	7,192	85	620	43,288	509	70
福島県	12	110	9,957	52	216	18,949	364	88
茨城県	0	0	0	1	3	180	180	60
合計	88	559	38,931	317	1,787	125,844	397	70

たデータをみます。宮城県は完成が 85、区画数が 125 で、1 区画当たりの面積は 70 平米です。この件数はすごく多いわけではありませんが、1 件あたりの規模は大きいという特徴があります。

漁協や漁業生産組合がかなり中小機構の予算を使っています。漁協の事務所や倉庫、生産組合の倉庫兼事務所といったものを作っています。もちろん水産加工業、卸小売業の方々も利用しています。当初から、水産庁の補正がなかなか、特に加工流通分野に使いにくい、と言われていました。ですから、今回の震災では中小機構への期待が大きく、結果的に利用されていたということです。

青森県の三沢市漁協では、中小機構を利用して漁業者用漁具倉庫を建てた例があります。中小機構から三沢市に一括無償貸与で、市から漁協に無償貸与という形になっています。入居者は三沢市漁協組合員などで、26 区画、641 平方メートルです。

岩手県大船渡市でも、整備出荷や包装品の会社が一緒になって、中小機構を利用しています。仮設店舗や仮設作業場が建てられ、中小機構から大船渡市に一括無償貸与、市から被災事業者に無償貸与となっています。4 区画、310 平方メートルです。

宮城県女川町でも、仮設倉庫が建てられ、漁協支所の管理、地区漁業者の共同利用という形で入居されています。

茨城県大洗町では仮設事務所が建てられ、漁協の販売事業や加工事業、それに仲買人の協同組合の事業所が入っています。これも中小機構で作っていて、中小機構から大洗町に一括無償貸与され、町から入居者に無償貸与となっています。

この間私がずっと発言してきたことは、特に沿岸漁業の再建をどうするのか、ということです。今回の被災で共同利用漁船が補正予算となりました。共同利用漁船ですから、多くの場合、皆さんの立ち上がりまでの過渡的な利用で、というつもりでいるわけです。けれども私は、非常に申し訳ない話ですが、日本の沿岸漁業のチャンスではないかと思っています。それは立ち上がった後も本格的に協業したらどうかということです。みんな仲良くやろう、ということではありません。結果的に仲良くやることになりましたが、コストダウンだとか、あるいはその先の販売戦略だとか、そういう部分でメリットを発揮できるでしょう、競争してつぶし合うのではなく、一つの固まりになって戦えるでしょう、という意味で、そういう体制を作ってはどうかということです。震災前からかなり協同というのがあちこちにありまして、私はそういったことを研究していたために余計思い入れがあるのですが、今回本格的に取り組んではどうかと思っています。共同利用漁船、あるいは共同利用の施設等で使える補助事業は、がんばる養殖やがんばる漁業です。

各地で協業が進んでいます。これは残った機械の共同利用もありますし、補助金で入れた物を使った協業もあります。

いくつか例を申し上げます。海苔養殖で 18 軒、21 名の方が参加され、乾燥機が 4 台あります。乾燥機にはそれぞれ人を当てはめるのですけども、沖の作業は全て一緒です。指揮者の下に共同で管理して、乾燥はそれぞれ別にしますが、製品は一緒にして販売してい

ます。利益は完全均等配分です。もちろん今回だけの過渡的なもので始めたわけですが、一部の人たちは、共同作業は非常にメリットがあると感じ始めています。計算するとコストが非常に安くなることと、体が楽だということで、この中の一部の方々は3年間の試業が終わった後グループでもやりたい、やるつもりだとおっしゃっていました。

協業のメリットは、コスト削減ができたり、労働負担が軽くなったりする

ということです。同じようなタイプで、従来定置網をそれぞれやっていたのですが、今回3軒が一緒に行っています。しかも、漁業権の範囲内でそれぞれの網の規模を大きくしています。3軒がそれぞれ規模を大きくして、それぞれで水揚げするより、メリットが出ています。1つの船に3軒が乗り込み、1ヶ統目と2ヶ統目を水揚げして、その内の一人が市場に持って行き、後の二人で最後の1ヶ統を水揚げする。売り上げは全部一緒にして、当面は均等配分。3人が一つになり、それぞれの網規模も大きくして、今のところかなりいい成績を挙げているそうです。ここはおそらくこの後もずっと一緒に操業していくと思います。

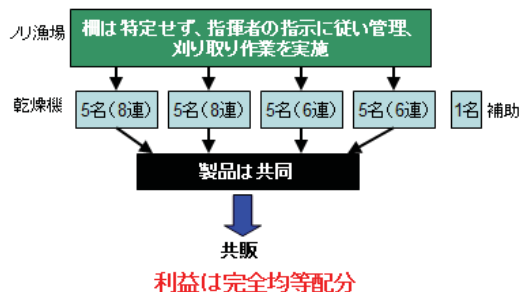
この近くにあるギンザケ養殖でも、仕方なく始まった協業とおっしゃっていましたが、やってみると非常に、もともと協業せざるを得ない部分もずいぶんあった操業でしたので、結果的にはいい方向に行っていて、できれば協業を続けたいということです。

震災と関係なく、いわゆる協業組織の数字を調べてみました。少し古い数字ですけど、底引きとか採貝藻、刺し網にはかなりの協業組織があります。そこで彼らがどういう意識を持っているかという、例えば漁獲量の維持もそうですが、魚価の維持安定や経費の節減というのを、かなりの人たちが実感しているようです。単に仲良しでやろうということではなく、非常に実利がある。魚価を維持安定できる、あるいはコスト削減できる、ということは経営維持安定につながるわけで、こういう意識を持って、今仕方なくやっている協業をもう一度見直してほしいと思います。

最後に、沿岸漁業に限った話かもしれませんが、家族だけの操業だと、後継者がいないとなるとその家の事情で廃業になるわけです。けれども協業であれば、例えばどこかの家に後継者が入ってくれば、組織としては残っていくことになります。結局、地域に産業としての漁業が残ります。家族形態だからだめだ、ということではなく、家族形態を一緒にして、ただその一緒にする仕方がなかなか難しいのですが、今ちょうどその操業の実験をしているところですので、我々はいろいろとサポートしながら、ぜひ新しい沿岸漁業の姿を作してほしいと思っています。どうもありがとうございました。

①のり養殖協業の事例

- ◆ 23年度：従来32経営体あったが、18軒が操業希望、21名（経営者18+息子3）で、残存乾燥機4台を利用した協業



50

第 1 部 シンポジウムー報告ー

水産基地気仙沼の復旧と復興計画

菅原 茂
(気仙沼市長)



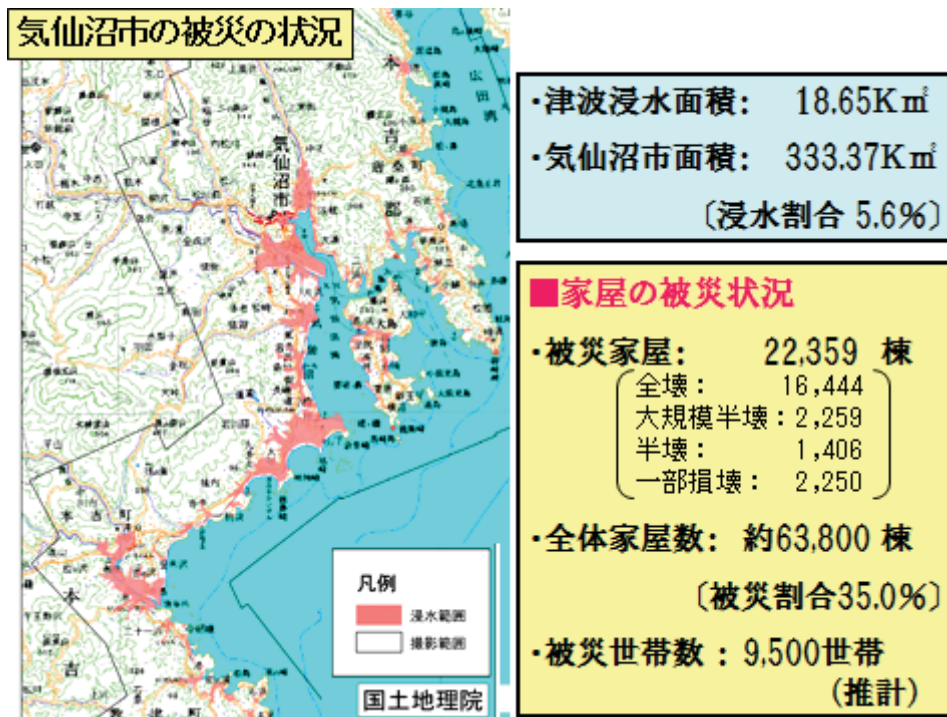
ただ今ご紹介を賜りました、気仙沼市の菅原でございます。今日は大変大勢の皆さんにお集まりいただきまして、ありがとうございます。また今回の企画をしていただきました気仙沼漁協さん、そして気仙沼水産業グループ運営会議さん、東京水産振興会さん、さらには漁業情報サービスセンターの皆さんのご努力に、心より感謝申し上げます。

まず、本日は全国からお集まりだと思えますけど、震災以来全国の、特に水産の関係者の皆さんから大変なご支援を継続的に頂いております。本当に、心より感謝申し上げます。実は今、年に一度の全国市長会の総会が東京で開かれています。今朝出席してきまして、野田総理の挨拶だけ聞いて切り上げてまいりました。今日は、水産基地気仙沼の復旧と復興計画について、気仙沼市外の皆さんにわかるように少しお話をさせていただきたいと思えます。前の講演者の報告を聞いていないものですから、重なる所がありましたらご了承願いたいと存じます。

まずは気仙沼の津波による被害状況です。震災の被害状況ですが、6月5日現在で、亡くなった方が1,035名、そして行方不明者が282名、身元不明の方がまだ44名いらっしゃる状態です。その他震災関連死ということで96名です。実は、1,035名、282名という数字の中に、身元不明者が重複しておりますので、実際の犠牲者は1,273名前後と思っています。人口に対して1.7パーセントです。パーセンテージは小さいのですが、大変大きな絶対数だと思います。その人口が残念ながら減っております。6月末に69,368人で、4,879人減少しております。ですから実際は3千5、6百名の方が流出している計算になります。ただ5月末は4月に比べまして減少が鈍化しておりますので、このまま何とか下げ止まってくれないかなと思っている次第です。

気仙沼の被災に関してポイントとなるものの一つが被災面積です。気仙沼の浸水面積は18.65平方キロで、気仙沼は山が多いので、全体面積の5.6パーセント程度が被災したことになります。被災家屋は22,359で、その後の新しい家を頂いて何とか、補助数に関しましては世帯数が一番下、私たちは9,500がだいたい被害に遭われた被災者世帯数と捉えております。

次は実際の津波の映像を、市内の方は何度も見られたと思いますが、少しお見せしたいと思えます。あ、すみません、今日は動画が動かないそうです。



魚市場の屋上から撮らせていただいた写真があります。石油タンクが倒れているところ、また魚市場の前が渦巻いているところ。その後火災が発生しまして、この火災は、市役所のビル屋上から撮った海岸の方向でございます。気仙沼市はご存じの通り、地震、津波、そして火災ということで、翌日にはがれきの山、道路が見えなくなるほどの状態になりました。魚市場の、今工事を始めている南側の写真。路盤そのものが流出をしてしまったということです。また多くの漁船が火災に見舞われたり、陸上まで運ばれてしまいました。この右側のまき網船はだいたい海岸から 800 メートルほど流されておりま

もう一つ、私たちに立ちはだかったのは、地盤沈下でございます。これは国土地理院が衛星を使って測った結果ですが、気仙沼市の場合は 60 数センチから 70 センチくらい、だいたい全域にわたって沈下した。それとさらに、東南東に 4 メーター半ぐらい、また 5 メーター近く移動しております。私たちは気づかないわけですが、実際にそのくらいの移動があったということです。

今度は産業界にどのくらい打撃があった



のかということですが、全事業所 4,102 の内、80.7 パーセントに当たる 3,314 事業所、またそこで働いていた従業員 30,232 名の内、83.5 パーセントの 25,236 名が被災されました。先ほど亡くなった人が 1.7 パーセントという話をしましたが、逆に、98.3 パーセントの方たちが命を取り留めましたが、働いていた方の 8 割は自身の職場が被災しています。いったん職場から離れざるを得なかった方が相当数出たということが気仙沼の特徴ではないかな、と思います。



4 月末までのハローワークの有効求人倍率をみると、一番減った時が昨年 5 月で、0.17 倍まで下がりました。本年 3 月に 0.63 まで回復して、4 月は 0.60 と少し落ちております。この 3 月と 4 月に関しましては、気仙沼だけではなく、例年必ず 4 月に新規の求人が出るという事で、この点は一時的なものと考えられます。また 5 月から少しずつではありますが、戻ってくるだろうと考えております。

宮城労働局管内の安定所別有効求人倍率の推移

安定所名	仙台	石巻	塩釜	古川	大河原	築館	迫	気仙沼
H23.2月	0.61	0.48	0.37	0.58	0.33	0.59	0.37	0.57
3月	0.58	0.43	0.35	0.48	0.32	0.55	0.45	0.52
4月	0.50	0.28	0.27	0.37	0.23	0.46	0.36	0.19
5月	0.49	0.29	0.28	0.42	0.22	0.56	0.37	0.17
6月	0.58	0.37	0.36	0.48	0.30	0.56	0.41	0.29
7月	0.70	0.45	0.44	0.61	0.39	0.72	0.52	0.33
8月	0.82	0.54	0.56	0.66	0.43	0.89	0.62	0.37
9月	0.94	0.59	0.63	0.80	0.50	0.96	0.74	0.38
10月	0.96	0.61	0.65	0.81	0.48	1.08	0.78	0.39
11月	1.01	0.66	0.68	0.84	0.54	1.08	0.81	0.43
12月	1.04	0.65	0.72	0.85	0.50	1.18	0.65	0.43
H24.1月	1.10	0.70	0.65	0.89	0.54	1.13	0.68	0.47
2月	1.17	0.77	0.72	0.96	0.57	1.13	0.71	0.55
3月	1.18	0.78	0.75	0.89	0.59	1.06	0.73	0.63
4月	1.08	0.77	0.68	0.80	0.51	0.88	0.61	0.60

有効求職者数・有効求人数・有効求人倍率の推移（ハロワーク気仙沼管内）

	求職者数	雇用保険 受給者人数	求職者－雇用 保険受給者 （非受給者）	求人数	求人倍率
H23.2月	1,778			1,019	0.57
3月	1,761			923	0.52
4月	4,410	1,006	3,404	838	0.19
5月	6,189	5,079	1,090	1,069	0.17
6月	6,325	5,511	814	1,836	0.29
7月	5,417	5,008	409	1,799	0.33
8月	4,835	4,660	175	1,800	0.37
9月	4,627	4,210	417	1,775	0.38
10月	4,321	3,760	561	1,703	0.39
11月	4,355	3,523	832	1,886	0.43
12月	4,287	3,335	952	1,858	0.43
H24.1月	4,131	3,056	1,075	1,929	0.47
2月	4,042	2,843	1,199	2,229	0.55
3月	4,041	2,636	1,405	2,542	0.63
4月	3,820	2,289	1,531	2,291	0.60

次に、有効求人倍率ですから全くのパーセンテージで、私たちが大事にしなくちゃならない数字は絶対数です。昨年の6月に6,325名の求職者が出ました。その時が最大の求職者、現在は4月の数字で3,820名まで減っております。おかげさまで各作業場が復興するにつれて、求職者の数は減っております。しかしながら残念なことに、失業保険の給付が切れても、なお求職をせざるを得ない、職に戻れない方々がいらっしゃいます。一番少ない時は175人ということで、多くの人が職を求めているけれど、同時に給付も受けていたということになります。しかしながら、4月以降どんどん給付が切れてまいりますので、現在では1,500人以上の方が職を求めつつ無収入という状況にあります。このことが一番大きな問題ですので、社会の安定という点でも、何とかここを克服しなきゃいけないと思います。

気仙沼の特徴としましては、数字上ではありませんが、就職が遅れている人たちというのは、40代から50代の女性が多いといわれています。主にその方たちが就きたい職業は、食品製造、または事務職とのことです。

それで、気仙沼市の復興計画ですが、先ほどお話を頂いていました、東京海洋大学の馬場教授にも委員となっていていただきまして、昨年10月7日に作成、完成をして、議会の承認をいただきました。基本となる事は、防災に関しまして、津波を二つのカテゴリに分けて防災を施そう、ということです。

その一つは、レベル1、数十年から百数十年に起こる津波です。気仙沼と言えば明治三陸大津波。このレベルまでの津波に関しては、何とかハードを、要は構造物で守る。守るものは何か。命と財産を構造物によってシャットアウトして守るという考えです。

レベル2、1,000年に一度と言われる今回のような津波に関しては、構造物では守り切れることはとても難しいです。何とか命だけは守りたい、ということで、多重な防災を施すハードに加えて、ソフトも加えることによって、命は何とか救おう、というのが今回の復興計画での防災に対する基本的な考え方です。

この考え方は被災時の、全国の防災に関する基本的な考え方として、国の中央防災会議から示されたものです。また副題として「海と生きる」としてしています。ここにいらっしゃる方々は、皆さん水産や海、また魚と親しんで生きていらっしゃる方だと思えます。気仙

沼で生きるということは、海と離れることではなくて、海と生きるということだということを、副題として書かせていただきました。

復興計画の目標ですが、6つあります。主に水産に関る4点についてお話しします。

一つは「津波死ゼロのまちに」。これは水産業に携わる以上、海岸の近くで生活する、仕事をするることになります。一番の目標は、津波死ゼロの町づくりということです。2番目として、早期の産業復活と雇用の促進が必要だということです。3番目にやはり持続発展可能な産業の再構築が必要です。5番目として「スローでスマート」。つまりスローライフでスマートシティを目指すんだという考え方です。

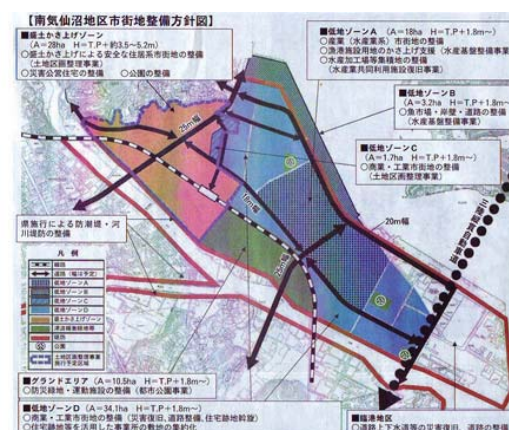
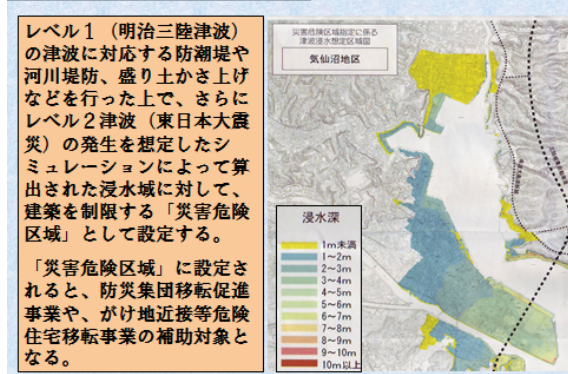


さらに、津波死ゼロの町づくりの根幹となる、先ほど言いましたレベル1に関してどのように対応するのか。これは国、県、またさまざまな研究機関が入りまして、命と財産を守るのに必要な津波に対する構造物、堤防高が出されました。例えば内湾で、標高G P 5.0、道路が1.8では、実質は3.2メートル必要になります。魚町の内湾では6.6メートル、気仙沼市全域にわたっていると、もっとも津波が高いと思われる地点では14メートル以上が、レベル1であつても必要だということです。今回の津波であればもっともっと高さが必要ですが、そのレベルまでは目指さないということです。

レベル1に対応する防波堤や堤防を築いたという前提で、今回の津波、いわゆるレベル2の津波が来たら、どこまで浸水するのか、図があります。1メートル以下の一番浅い所が黄色、そしてだんだん青に近くなると浸水が深くなってまいります。そういうシミュレーションをした結果、やはり残念ながら、今回私たちが堤防を作り得たとしても、浸水してしまう所があります。その場所を災害危険区域と指定をする準備を、今、しております。6月

の市議会で承認を得たいと思っています。災害危険区域と指定をすることによって、防災集団移転促進事業の基本要件となり、また任意移転による崖地建設等危険住宅移転事業の補助対象となります。ここに土地を持って住宅を建築する場合は、制限をつけさせていただく、つまり堅牢な建物で浸水が想定される以上の所に居室を設けるということが、最低の条件です。できればそこには住まないでいただきたい、というのが、危険区域です。一方、産業に関しては、そこに人が寝泊まりするわけではありませんので、基本的にはやはり問題なく作っていただいて結構だ、という地域になります。その上で、例えばこれは南気仙沼地区ですが、ゾーニングをしながら危険に対しても認識し、かつ町づくりを考えていこうと、一つは避難道の整備をする、もう一つは土地区画整備を住宅地、そして商業地の一部に行う、さらには一部を漁港区域、その中でもとりわけ水産施設用地として指定をして嵩上げも行う。また緑になっている所は都市公園ということで、これも嵩上げをして防災に資する、という考え方です。

「災害危険区域」の設定



復興計画の目標の2番目に、早期の産業復活と雇用の促進を掲げています。昨年9月までに何とか魚市場が機能できるようにと、市でも魚市場の嵩上げをさせていただきました。今も引き続き、魚市場の再建につなげていこうと事業を進めております。この間、民間の皆さんが各々大変ご努力をされて、できる方は工場を直しながら、復活を図っていただいている。また各水協法団体の皆さんも、水産庁とも相談をしながら、みんなで使える施設をとということで、一生懸命回復をしていただいています。大変ありがとうございます。

今日はカツオの1船目が入港したということで、16年連続日本一に向けてスタートを切りました。去年は業界の皆さんの努力、また日本中の漁業者そしてサポーターの皆さんのおかげで、カツオの水揚げ日本一を15年間続けられたということです。ここまで来れば16年も何としても、というのが浜の皆さんのお考えではないかなと思っています。カツオの水揚げが去年は28日

■ 気仙沼港でカツオ水揚げ震災から3カ月半ぶり 〔平成23年6月に再開〕



だったと思いますが、今年はそれより 2 週間も 3 週間も早く来たということで、期待がふくらみます。

気仙沼でカツオ初水揚げ 今年はやや早く
参照：毎日新聞HP 2012年06月06日



魚市場に 6 日、カツオが今年初めて水揚げされた。昨年は震災の影響で 6 月 28 日だった初水揚げも、今年は平年よりやや早い 6 月上旬となり、市場は活気に満たされた。

震災では地盤が約 7.5 センチ沈下するなどの被害があった市場だが、昨年もカツオの水揚げ日本一を保ち、15 年連続で全国トップ。この日は、静岡県沼津市船籍の「58 浜平丸」が、銚子沖でとれた約 4.0 トンのカツオを水揚げ。船から上がるとすぐに市場関係者が重さを量ったりして、選別作業に入っていた。

気仙沼漁協の佐藤亮輔組合長は、「昨年よりかなり早くできた。やはり初水揚げはうれしい」と話した。

■気仙沼でサンマ初水揚げ 被災漁船が漁獲、帰港
本州有数のサンマの水揚げ量を誇る宮城県気仙沼市の気仙沼港に 24 日、東日本大震災後初めてサンマが水揚げされ、市場が活気づいた。
〔参照：河北新報 平成 23 年 8 月 25 日（木）〕



「目黒のさんま祭」(9月18日) 16 回目を迎える今年は、震災の影響で開催が危ぶまれましたが、気仙沼市の復興につなげたいと、約 5,000 匹のサンマが気仙沼市から直送されました。



サンマは、昨年は冷凍設備がほとんど復旧していなかったということで、関係者の踏ん張りもありまして、継続的に船を入れながら、サンマの気仙沼という名前を絶やさず保っていただきました。9 月には目黒にもサンマを運んで、これも 16 回目の目黒のサンマ祭りをやらせていただきました。今年の回復というのは、まだ 100 パーセントではない、ということですが、昨年に比して多くの数量を扱っていただけるように私たちも支援していきたいと考えております。その支援の一環として、気仙沼は魚市場の周りも地盤沈下し、雨や大潮の時に冠水している所が広がっておりまして、こういう状態で食品、水産物を扱うということは、去年の急場ならいざ知らず、今年になってなんだ、という話になりますので、市で周りの地権者の皆さんのご了解を得まして、無理に嵩上げではなく、今回衛生にポイントを置きまして、覆土をさせていただいております。このことが、魚市場近くの環境整備の一助になるということで、今急いで工事を行っています。

気仙沼市では放射能に関して、気仙沼の魚が安全であるということ、胸を張って商売していけるために努力をさせていただいております。具体的には、気仙沼魚市場に機械を 1 台設置して、ただその 1 台だけですと朝に 3 検体がせいぜいですので、追加で 3 台を注文しています。入札前に気仙沼魚市場と相談しながら、検体を取って、安全なものを販売していくことを、全国の皆さんに約束する、というお手伝いをさせていただいております。

特別アピール

気仙沼の魚は安全！



先ほどお話があったかもしれませんが、一般の食品の基準が 500 ベクレルから 100 ベクレルに 4 月 1 日からなりました。アメリカは今でも 1,200 です。日本のこの 100 という数字は、非常に安全を見た数字だということがわかると思います。飲料水が 10 となっており

食品に含まれる放射性セシウムの基準

従来の分類	暫定規制値	新分類	新基準値	米国	EU
野菜類	500	一般食品	100	1200	1250
穀類					
肉、卵、魚					
飲料水	200	飲料水	10	1200	1000
牛乳・乳製品		牛乳	50	1200	1000
(注)単位はベクレル 食品1kg(100g)当たり		乳児用食品		1200	400

※放射性セシウムの基準値は国・地域によって違いがある。

ですが、気仙沼市では定期的に放射能測定をしております。飲料水に関しましては、今まで検出された事がございません。

この100という数字ですが、人間が1年間に1ミリシーベルト、一人年間1ミリシーベルトの被ばくをすると、それ以上だと問題があるのではないかと、ということを前提に飲料水の線量をひいて、それでは一般食品ではいくらまで許容できるのか、ということで算出されています。最も食べ物を食べる年代、13歳から18歳の男子が1年間にすべて120ベクレルに汚染されたものを食べ続けたとすると、年間1ミリシーベルトになるそうです。ここでの120という数字に対して、さらに安全を見て100という数字。では、日本で120ベクレルに汚染されたものを食べ続けるということ、全ての食品がそれだけ汚染されているということがあり得るのかということ、あり得ないわけです。そういう厳しい数字を、今課しておりますので、これに加えて50とか25とか、さらに厳しい数字を流通段階で設けるという事に関しては疑問を感じます。なにはともあれ、この100という数字の安全性を、まずもっともっと国民の皆さんに知っていただくことが大事と考えている次第です。

「一般食品」の基準値の考え方

(厚生労働省HPより)

- 食品中の放射性物質(放射性セシウム134及び137、ストロンチウム90、ルテニウム106、プルトニウム)からの線量が年間1mSvを越えないように設定する。
- この際、放射性セシウム以外の核種は、測定に時間がかかるため、放射性セシウムとの比率を算出し、合計して1mSvを越えないように放射性セシウムの基準値を設定する。

年齢区分	摂取量	限度値(Bq/kg)
1歳未満	男女平均	460
1歳～6歳	男	310
	女	320
7歳～12歳	男	190
	女	210
13歳～18歳	男	120
	女	150
19歳以上	男	130
	女	160
妊婦	女	160
最小値		120

「飲料水」の線量＝飲料水の基準値(Bq/kg)×年齢区分別の飲料水の摂取量×年齢区分別の線量係数

- 飲料水については、WHOが示している基準に沿って、年間線量を約0.1mSv、基準値を10Bq/kgとする。
- 一般食品に割り当てる線量は、介入線量レベル(1mSv/年)から、「飲料水」の線量(約0.1mSv/年)を差し引いた約0.9mSv/年となる。
- 当該線量を年齢区分別の年間摂取量と換算係数で割ることにより、限度額を算出する。(この際、流通する食品の50%が汚染されているとする)。

気仙沼市として、水産業の集積高度化のために今、何をしているか。一番目としまして、

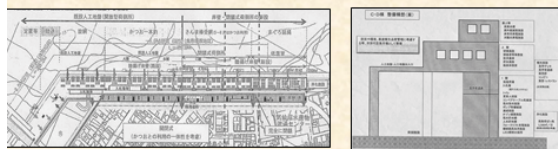
魚市場の再建があります。魚市場の水没した南側、その場所も含めまして、さらに南の部分を、水産庁と相談しながら、市場の設計にあたっているところでございます。業界の皆さんからさまざまなご意見をうかがい、反映させていきたいと考えております。その魚市場ですが、基本的にやはりこれからの魚市場ですので、衛生管理が大事です。また、これまでの魚市場は、船が大型化している中で、魚市場の岸壁が次第に下がってきた、というよりも潮が従前より上昇している傾向にありましたので、嵩上げをしっかりとしていく。低温の売り場を設置する。全体として 950 メーターの岸壁を確保しよう。これからの課題、できるかどうか検討中ですが、船倉水の処理。多くの水産加工場の皆さんは、自分で汚水処理をしながら下水に流していただいています。船が水揚げする時に、船倉から出る水については、残念ながらこれは気仙沼に限らず、日本全国、海にそのまま放出をしている状態です。このことが無視できない問題をはらんでいるのでは、という問題意識から、何とか船倉水を陸上で処理できないか、今水産庁とも相談をしています。

それともう一つ大きなポイントになるかと思いますが、この魚市場は、単に漁業者の皆さん、水産流通関係者の皆さんだけの施設ではありません。気仙沼のもう一つの産業であります、観光というものにも大きく資する必要があります。観光関係者にも意見を伺いながら、多くの人が訪れる魚市場を目指したいということで、観光という観点。また、魚市場が大きな避難施設になったということ。多くの方が働いています。また多くの方が周りで仕事をしています。そういう中であって、魚市場の防災避難施設としての機能は、よりいっそう求められている、という観点で施設提供していきたい、そう考えております。

2 番目として水産加工施設と集積、ということで、6 月 4 日付けの官報告知で、気仙沼市の南地区、そして鹿折地区で、漁港区域の拡大をいたしました。漁港区域の拡大そのものでは特に何もなし、それだけでは何か新しいことが生まれるわけではありませんが、この

①魚市場の再建

- ・衛生管理
- ・低温売り場
- ・船倉水処理
- ・防災避難施設
- ・嵩上げ
- ・全体 約950m
- ・観光



②水産加工施設の集積

気仙沼市では、南気仙沼地区と鹿折地区の一部を水産加工施設等の集積地として整備し、基幹産業である水産業、特に水産加工業の早期復旧・復興を実現し、雇用の回復と拡大を図る方針です。



漁港区域を拡大し、その区域を漁港施設用地として利用することで、国の公共事業（水産基盤整備事業）による嵩上げ等の基盤整備を行います。

※ただし、水産加工施設等の水産業関連施設は新たに建てられなくなります。

漁港区域を拡大したことによって、その内側で水産庁の公共事業、水産基盤整備事業を行うことができます。具体的には、盛土・嵩上げをして、その上に水産関係施設の集積をするということです。土地区画整理を行いますと、立地に時間がかかります。そのことを短縮するために、いったん国のお金で市がこの中の土地を買い取ることができる、となっています。市での買い取りの

後、水産関係施設の方にお譲りをする、分譲する、ということになります。しかし一方で、水産関係施設の所有者の皆さんは他に土地があり、また多くは被災して債務を抱えています。おいそれと、新しい土地をこの中に求めることは難しい、という状況にあります。そのことを克服するため、水産庁とずいぶんやり取りをしまして、いったんこの土地を買わなくても借りることができる、やがて自分がこれまで持ってきた土地が売却できたらその時に、内側の土地を買っていただく、という順番で入っていただけるようになっています。従いまして、この中に今すぐにでも手を挙げて申し出ていただければ、市として発注したい、そう考えている次第です。6月の議会で、この二つの場所の盛土・嵩上げをする予算を計上しております。予算が下り次第、発注したい。できる場所から、多くの同意が頂けた所から、まず盛土を始めたい、と考えています。

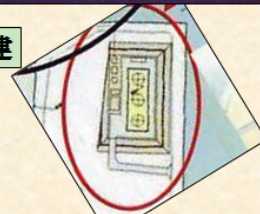
それと水産というのは、獲る人がいて、そして買う人、加工する人がいて成り立っています。しかしながら気仙沼港の凄味はそれだけではありません。その水産また漁業を支える関連産業の充実というものが、三陸の中でもダントツが揃っていると思います。その機能を失ったのでは気仙沼港の繁栄はない。今、造船業を集約できないかと、関係者による話し合いが進められています。また石油タンクも以前のような大きさは必要ではありませんが、安全な形で再建をしなくてはならない。このことも市で担っていくつもりで計画を立てているところです。

③漁港機能の充実

・造船業等集約



・石油タンクの再建



先進的水産基地を目指してということで、これまではどうだったのかと言うと、残念ながら右肩下がり、生産額は少なくともそういう数字です。参加されている皆さんにおいては大変努力され、成果をあげていらっしゃる会社も多いと思いますが、全体としてはどうしても右肩下がりです。今回、水産施設用地等の整備によって、また各社の工場を集約することによって、合理化等は図れると思います。しかしそのことだけで、この右肩下がりの状況を克服することができるのかどうか、まだ不十分ではないかなという問題意識を私は持っております。

④先進的水産基地を目指して

- ・これまで右肩下がり
- ・集約・合理化だけでは不十分
- ・経営革新による成長戦略の必要性



■イノベーションのお手伝い

【市の施策】

- ・コンプレックスファンド
〔創造的産業復興支援事業〕
- ・イノベーター公志園
- ・東北未来創造イニシアティブ
- ・東京海洋大学「三陸サテライト」
- ・気仙沼フューチャーキャンパス（仮称）

経営革新という市が言うような話ではないですが、経営革新なり技術革新なり、そういう意識を持って、成長戦略を持っていたくことが、新気仙沼港には必要なのではないかなと思っています。そのために、では市はとりあえず何をするかという、これまた、

経営革新という市が言うような話ではないですが、経営革新なり技術革新なり、そういう意識を持って、成長戦略を持っていたくことが、新気仙沼港には必要なのではないかなと思っています。そのために、では市はとりあえず何をするかという、これまた、

絶え間なくいろいろなことを相談しながら出していきたいと思います。今、実は市の施策として、イノベーションのお手伝いをしようと考えています。6月議会で、創造的産業復興支援事業というものを予算化しております。全体で7,500万円の予算を取り、1件当たり1,000万円以内の給付型、お返ししていただく必要はない補助事業を実施したいと思っています。これは、歌手の布袋寅泰さんと吉川晃司さんのユニットであるCOMPLEXが全国ツアーをして、そこで得た収益金を被災地で使ってください、ただそのまま使うのではなくて、新しい産業を興す人、また新しい分野に進出する人、そういう人を応援してください、ということで頂いた7,500万円が財源です。最大1,000万円ということで、予算が通れば広報に出します。水産の中でもいろいろな可能性があると思います。たくさん応募いただければありがたいなと思っています。

イノベーター甲子園。少し聞き慣れない言葉だと思いますが、これは全国でイノベーションを起こしている人たちの全国発表大会です。今年、7月21日に気仙沼で全国大会が行われることになりました。実行委員会は、財界の重鎮の方々が名前を連ねています。実行委員長は武田薬品の長谷川さんです。その7月21日、甲子園に参加するのは全国の皆さんですが、せっかくの機会ですので翌22日に気仙沼の皆さんを対象とした創造的復興フォーラムを計画しています。全国の経済人の方々と気仙沼の皆さんの話し合いの場、ディスカッションの場にしようと、準備を進めております。7月22日になります。

東北未来復興イニシアティブ、これは東北大学の経済学部長の大滝先生と、アイリスオーヤマの社長さんが音頭を取って、東北に新しい産業のうねりを興そうではないかと動いていらっしゃいます。気仙沼にもその枝を作って、継続的にそういうことにトライする人たちを支援していこうということです。先ほど登壇された馬場先生の東京海洋大学でも産業サテライトということで、事務所を作っていただきました。いろいろな相談に乗りながら、気仙沼の復興と一緒に活動していただいております。

最後は気仙沼フューチャーキャンパス。仮称ですが、現在気仙沼には、30を超える大学からいろいろな形で支援をいただいています。その中には経済関係の方、さまざまなノウハウを持っている方がいらっしゃいます。気仙沼市は、東京海洋大学と連携協定を結びましたし、先日明治大学とも締結いたしました。他に早稲田大学や慶応大学など、さまざまな方が入って、気仙沼の町づくりに努力をいただいています。大学の先生方や、イノベーター甲子園のベースとなっている東京の財界の皆さん、そういう方たちを講師として、気仙沼市が音頭を取って、連続的にさまざまな企業の皆さんにとって有意義となるような講演会をしていこうと考えております。そのことを仮称、気仙沼フューチャーキャンパスと言っています。気仙沼市としてはこれ以外にもう少しハードの支援、これはお金が関わりますので、今ここでどれはいくらという話はできませんが、もう少しハードに関する支援につきましても、市も国から一定程度交付金をいただいておりますので、必ずや何かの支援をさせていただきたいと思います。

それで実は、少し長くなって恐縮ですが、昨日水産関係の全国の市長さんたちの集まり

がありました。そこに水産庁漁政部の企画課長がいらっしゃって、いろいろお話をしてみました。今日は水産のプロの方ばかりなので、数字はご存知かも知れませんが、私としては非常に衝撃的な数字を頂きました。平成 22 年度に日本人は、一人何キロ魚を食べたかという数字です。29.5 キロ。平成 22 年に 29.5 キロだそうです。この数字は極めて衝撃的な数字です。なぜかと言うと、9 年前、平成 13 年には、実は 40 キロ食べている。この水産の歴史の中であって、日本の歴史の中であって、10 年間にこのような劇的な減少というのは初めてだと思います。40 キロが 29.5 キロ。今日は水産庁の上田さんも来られていますので、いろいろお聞きしたいなと思いますが、企画課長さんが新しく水産基本計画を見直すということで、数字を挙げておられました。平成 34 年度にいくらを目標とするのか、と伺いましたら、やっぱり 29.5 キロ、ということでした。この傾向を止めるのがやっとなというのが、水産庁の見通しだそうです。

非常に寂しいなと思って帰って来たわけですが、二つ要因があると思います。まず、魚離れ。加齢によって肉から魚に移ることが期待されていましたが、そのように全く移らなかった。特に子どもや、子どもより 10 歳下の年齢の人たちのようなハンバーガー世代は、何歳になってもハンバーガーを食べ、魚を食べるようになっていない、ということがあります。その事に対して魚食をどのように展開していくのか、水産庁の中でも若手の皆さんが集まって、ファストフィッシュと言っていましたけども、簡単に食べられる魚をこれからもっと強調して消費者に訴える必要があるのではないかというお話でした。

それに対して私は別な事を示唆させていただきました。食べていないということも事実なのですが、獲れていない、獲っていない、という事も大きな要因としてあると思います。企画課長さんが「日本は世界で 4 位の漁業生産国です。世界で 4 位というのはあまりないのですよ」とおっしゃるのに対して、「そうではなくて、日本は 1 位だったんじゃないか」と。漁業就労者が減って、かつて 1,200 万トンあった水揚げが、その半分、また 3 分の 1 近くになってしまう、という現状。そのことがやはり魚食を増やしていけない、結果として魚を食べる機会を減らしてしまうという、実はベースの定義になっているのではとお話をしてみました。ですから獲る方も充実しなくてはいけない、一方で食べてもらうことも工夫しなくてはいけない。両面からやって、先ほどの「平成 34 年に 29.5 キロ維持」が目標ではなく、それをもっと増やすように私たちは努力しなければ、気仙沼の明日はない、と考えています。

今日の日経新聞で、魚売り場は輸入サーモンやサーモントラウトが幅を利かせていると出ておりました。またそれをニュースも取り上げていました。マルハニチロさんのホームページに回転寿司のアンケート調査結果が、こと細かく書かれております。そこを見ますと、なぜサーモンになったかという結論にいたるような数字が出ています。

しかしながら先ほど言いましたように、これからの水産、29.5 キロをかつての 40 キロに戻す、私たちはその努力をしていきたい、その使命が気仙沼にあると思っています。あと 10 キロを輸入のサーモンやサーモントラウト、それもいいでしょう。しかし、私たちは国産のカツオやサンマで補っていくことが使命では、と思います。そういう気持ちで今日は全国市長会から帰ってきました。今後とも業界の皆さんのご努力、私たちも一生懸命サポートをさせていただきます。また全国の皆さんのご支援の努力をお願い申し上げまして、少し長くなってしまいました。私からの報告とさせていただきます。ありがとうございます。

司会： シンポ報告といたしまして、水産庁専門官、森田貴己様、東京海洋大学教授、馬場治様、そして菅原茂気仙沼市長よりお話を頂きました。まことにありがとうございました。

本市は発災以来、全国・全世界の皆様方から多大な御支援・御協力をいただきました。この場をお借りして深く感謝を申し上げます。
皆様方の御厚情に報いるためにも、一日も早く活気溢れる港町気仙沼を復活させる事を誓います。



第1部 シンポジウムーリレートークー

横山ノリコ（魚問屋経営）

渡會かおる（全日本海友婦人会気仙沼支部副支部長）

齋藤千津（気仙沼つばき会）

菅野一代（沿岸漁業者）

木村玲子（気仙沼市教育研究会食育部会長、気仙沼市立馬籠小学校校長）

鈴木玲子（気仙沼市婦人会連絡協議会会長）

上田勝彦（水産庁増殖推進部研究指導課 情報技術企画官）



司会： 続きましてシンポジウムは、リレートークに入らせていただきます。

皆様にご紹介申し上げます。ご発言順に、魚問屋経営・横山ノリコさん、全日本海友婦人会気仙沼支部副支部長・渡會かおるさん、気仙沼つばき会・齋藤千津さん、女性沿岸漁業者・菅野一代さん、気仙沼市教育研究会食育部会長で気仙沼市立馬籠小学校校長・木村玲子さん、気仙沼市婦人会連絡協議会会長・鈴木玲子さん、どうぞご登壇下さい。大変お待たせいたしました。緊張されていますか？それでは順番にマイクをお渡しいたしますので、ステージの前の方にご登壇いただきまして、どうぞご発言をお願いいたします。はじめに、魚問屋経営、横山ノリコさんです。

横山： どうもお世話様です。私は市内で、体型に似合わない小さな問屋をやっております、横山と申します。よろしく願いいたします。私はこの気仙沼に生まれまして、気仙沼で育ち、ずっと気仙沼に住んでおります。何でも気仙沼のことならわかっていのように思いますが、実は何もわからないのです。井の中の蛙なのです。さっ

き市長さんに、いろいろと今日私が言おうとした事を全部言われてしまいました。ですので、私は大切な心を持って、人と人とのつながりを大事にしていきたいなと、そういうお話をさせていただきます。そうすることで、気仙沼に一隻でも多くの船に水揚げしていただくことを願っております。気仙沼は、魚食推進健康都市を宣言しています。でもなにか、そういう言葉が忘れ去られてしまっているのです。気仙沼市でも、もう少し魚食推進に力を入れて、もっともっとアピールしていただきたいなと思っております。それには一つ例を挙げますと、気仙沼市の広報に魚の食べ方、レシピを掲載する。カツオの時期にはカツオを、煮たり焼いたりいろいろな方法でおいしく食べられることを伝えていただきたい。それからサンマの時期にはサンマのレシピ。サンマも刺身に、煮たり焼いたり。あるいは私はなめろうも大好きで、そういう作り方のレシピを作って、広報に小さく載せるのではなく、パンフレットにして、そして広報にはさみこむ。そういうやり方も



私は一つの例かなと思っております。私たちは気仙沼、魚の町に住んでいる者ですので、水産業の皆さんを応援するためにも、魚をどんどんこの町から食べていかなければならないですね。気仙沼市民が魚をいっぱい食べて、元気で健康な市民が多くなるようにしていただきたいな、と思っております。何かとりとめのないことを申しました。ありがとうございました。

司会： トップを切りまして、力強いご発言ありがとうございました。魚問屋経営の横山ノリコさんでございました。ありがとうございました。

続いて全日本海友婦人会気仙沼支部副支部長・渡會かおるさん、お願い申し上げます。

渡會： 皆さん、こんにちは。遠い所からようこそ気仙沼においでいただきました。長時間、講演でお疲れかと思えます。今日の会場には場違いかもしれませんが、私は漁業ということで、沿岸漁業、うちの主人のことをお話ししたいと思います。

被災後、私の姪の子どもが、宮沢賢治の「アメニモマケズ、カゼニモマケズ」という詩が好きで、どんなことがあっても負けないで、私は絶対生きて行く、ということをテレビに出て言っておりました。私も実際本当にそうだと思います。何もなくなってしまったこの気仙沼市沿岸地帯。うちでも、家こそ残りましたが、ワカメ養殖を、主人は沿岸でしておりましたけれども、海岸の資材、全部流されてしまいました。本人はどうでしょうか、迷っていたと思いま



すが、口には出しませんでした。そして数年前、5年くらい前まで働いていた会社の社長さんがお見舞いにいらしてくれて、「船頭、おまえ、何が欲しいのや」と言うのですね。即座にうちのお父さんは、「漁師は船だべ。」と返したら、「ほんじゃ、やるよ」って、北海道の稚内まで船をもらいに行きました。自分の船だけでなく、養殖組合の仲間たちの船、唐桑や大島といった所の船も30隻ぐらいいただいてまいりました。いただいたその気遣いというか、皆さんがその時一生懸命自分たちのことのように心配して、いろいろとお互いが通じたように感じたのですね。それを、感謝の心というか、通じてくれた心に必ず答えなくちゃいけないと。そのもらってきた船のおかげで、ワカメ養殖の準備などができました。養殖にするにあたっては、本当に大変だったと思います。道路を直したり、がけ崩れの所、地盤沈下の所など、自分たちで土俵をして。海水が入らないようにしたり、電気が来ません。海の方は家が1軒も建っていませんから、電気を引く必要がないわけです。でもワカメをボイルするにも、揚げるにも、電気が必要なわけなのです。それで港湾は県の管轄ですから、県に働きかけまして、ワカメ養殖をやるのに電気がなくてどうするんだって、電気を早急に引いていただきました。皆さんのおかげ様で、ワカメを作ることができました。本当に船は頂いたものです。船は稚内から、船のエンジンは焼津の方から、いろいろな方々からご協力いただきました。本当に皆さんの絆というか、交流がいかに大切か、ということも感じました。一生懸命作った、入札前の初ワカメ。一番最初のワカメを、お父さんの友達と一緒にシールを作りまして、復興ワカメと名付けまして、全てお世話になった皆様方にお送りいたしました。本当に皆様方のおかげです。うちのお父さんとも「この気仙沼は漁業なくしては成り立っていないんだ、みんなで知恵や力を出し合って、一生懸命やっていかないと。」って話しています。皆様のご協力よろしくお願いしたいと思います。

司会： 渡會かおるさんでした。ありがとうございました。

続きまして、気仙沼つばき会・齋藤千津さん、お願い申し上げます。

齋藤： 皆さん、こんにちは。私は気仙沼つばき会と言いまして、ご存知じゃない方もいらっしゃると思いますが、全員女性だけの会で、メイン事業といたしまして、このような格好でこういう旗を持って、出船送りをするようにしています。この出船送りなのですけども、気仙沼市のある船頭さんから「昔にぎやかだった頃の出船送りがもう一度見たいんだ」というお話をいただきました。昔から気仙沼市には、五色のテープがたなびいて、大きな軍艦マーチが鳴って、爆竹も鳴って、「いってらっしゃい」と見送る、そういう出船送りがずっとありました。だんだんと漁業を取り巻く環境だとか、日本人乗組員さんの減少に伴って、港に元気がなくなっているというのは、漁業に携わってない私たちでも感じていました。どうにかこの気仙沼独自の



出船送りという文化を、もう一度気仙沼市の皆さんにも思い出していただきたい。気仙沼を訪れるお客さんにも、この出船送りを体験してもらって、気仙沼で獲れた魚の味とか、漁師さんに対する気持ちとかが少しでも変わっていただけたらと、この出船送りを始めました。先ほど市長もお話しされましたが、震災で気仙沼市全体の 5.6 パーセントが浸水しました。この数字だけ見ると少しかもしれませんが、その内 80 パーセントくらいは、水産業が被災しているということで、いかにこの気仙沼市が、海や港と直結した生活、暮らしをしていたか、この震災でとても実感しました。私たちもこの出船送り活動が続けて行くかどうか、迷いました。昨年カツオ船の切り上げの時に、出船送りではないですが、1 年間水揚げしてくれてありがとうございます、という感謝の気持ちで、去年は確か 11 月 19 日頃だったと思うのですが、お見送りに行きました。その中の 1 隻の船の船頭さんが今期で終わり、地元に戻って船を降りる、という方で、私たちに「見送ってくれてありがとう」って逆に言われたのです。私たちが水揚げをしてくれてありがとうって、そしてまた 15 年連続カツオ水揚げ 1 位の感謝を先に言う前に、その船頭さんに「来ていただいてありがとう」と言われたので、私たちとしても、何か微力ながら気仙沼市の水産、漁業とか漁師さんとか、魚の水揚げの、少しでも力になればと思っています。

最後になりましたが、この出船送りに関しまして、気仙沼市や漁協はじめ、いつもご協力やご理解をいただきまして、本当にありがとうございます。これからも気仙沼市の水産をがんばって応援して行きたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

司会： ありがとうございます。衣装もばっちり決まっていっぱいいます。背中に気仙沼、齋藤千津さんでした。

続いて、女性沿岸漁業者・菅野一代さん、お願い申し上げます。

菅野： 皆さん、こんにちは。私は気仙沼市唐桑町という所で、カキ、ホタテの養殖をしております、菅野一代と申します。よろしくお願いいたします。この津波の前の年はチリ地震で、いかだがだいぶやられてしまいました。さらに今回の震災で、いかだの全て、工場の全て、そして自宅の 3 階まで海水が押し寄せ、全壊となってしまいました。3 世代にわたり築き上げてきた養殖の全てが、あの激流の中に飲み込まれて行った時は、本当に何と言うか、悲しい気持ちだったり、悔しい気



持ちだったり、空しい気持ちだったり、いろいろ入り交ざって、涙も出ませんでした。ですけど、全国の皆さん、全世界の方々から、暖かい言葉をかけていただいて、力強いご支援をいただいた時に、ただただありがたくて、涙があふれてきました。本当にありがたい気持ちでいっぱいなのですが、この度重なる津波で、多くの漁業者が「もうこの海では仕事はできないと、養殖はできない」と、辞められた方がたくさんいらっしゃいます。でもその中で私は、必ず気仙沼の美しい街並みや景色が戻ってくると描きながら、また私の作ったカキやホタテをおいしいと言って下さる方の顔を思い浮かべながら、またこの海でがんばっていこうと決意いたしました。そしてかつての自宅は、新しく皆様の役に立ちたいと、第 2 の人生というか、新しく生まれ変わったものに、ただ今必死に修繕中です。かつての自宅で、皆様に自慢できるホタテや、そしてこの三陸の海で獲れた、気仙沼の自慢のカツオやサンマを召し上がっていただきたい。そして船でカキいかだをご覧になっていただきたいとも考えています。これからは、皆様ともっと近づいたお付き合いをずっとしていきたい、そういう生き方をこれからはしたいな、と思っています。最後に、どうぞ皆様、まだ少し寂しい街並みではありますがすけれども、このすばらしい景色とおいしいものがたくさんある気仙沼に、足をお運び下さいますようお願い申し上げます、私のリレートークを終わらせていただきます。ありがとうございました。

菅原： ありがとうございました。菅野一代さんでした。またおいしいカキ、よろしくお願いします。待っています。

続きまして、気仙沼市教育研究会食育部会長で気仙沼市立馬籠小学校校長・木村玲子さん、よろしくお願い申し上げます。

木村： 皆さん、こんにちは。ただ今紹介に預かりました、木村と申します。食育部会の部会長をしている関係で、リレートークにお声をかけていただきました。気仙沼は被災を受けましたけれども、全国各地から暖かいご支援をたくさん頂戴いたしました。学校現場もたくさんの支援を頂戴し、今日はその中で最も印象に残ったエピソードを皆様にご紹介したいと思います。9月の末だったでしょうか、兵庫県の丹波市



の教育委員会から学校に電話がかかってきました。「丹波市の小学校の学校田で作ったもち米を義捐米としてお送りしたいのですが、ご迷惑ではありませんか。」という内容でした。ご存知のように兵庫県は、阪神淡路大震災で甚大な被害を受けた地域です。今回の東日本大震災では、兵庫県からの支援というのは、物資ともに非常に大きな力になりました。もちろん、私たちは喜んでそのもち米 30 キロを玄米で頂戴しました。そして、地域のおじいさん、おばあさんが埃を被ってい

た臼と杵を物置から運んで来てくれて、地域と学校総出で餅つきをいたしました。全校児童 35 人の小さな学校で、餅つきの日は 150 人もの方が集まりました。地域の幼稚園、老人ホーム、お巡りさん、ほんとに地域総出で餅つきをし、楽しい一日を過ごしました。このように食べ物というのは、人々の心を一つにして、体だけではなく、心を豊かにする力があるんだな、としみじみ感じています。

目黒のさんま祭りも、きっと同じような絆だと思います。特に目黒区の支援は、区だけで義援金 1 億円というお話も聞きました。やはりサンマという気仙沼の豊かな食が取り持つご縁と思います。

今基幹産業である水産業が壊滅的な被害を受け、学校現場も経済的に厳しい児童がたくさんおります。公的扶助という制度はあります。保護者の所得によって、学用品や給食費の公的扶助を受け取れる制度です。普通の学校では、受け取っている割合は 15 パーセント程度なのです。ところが、気仙沼のある学校では、70 パーセントを超えております。中には、親御さんの失職によって、将来の夢を断念する子どももたくさんおります。今日は、全国各地から水産関係の方が参加され、気仙沼の基幹産業である水産業の復興のために、力を貸していただけるということで、大変心強く思っております。学校現場も未来を担う児童生徒の育成のために尽力してまいりますので、どうぞ皆様、お力を気仙沼の復興にさらにお貸しいただくことをお願いいたしまして、私の話といたします。今日はありがとうございました。

司会： ありがとうございました。木村玲子さんよりお話をいただきました。馬籠小学校の被災後の様子なども交えてのお話でございました。

では最後に、気仙沼市婦人会連絡協議会会長・鈴木玲子さん、よろしく願い申し上げます。

鈴木： 私は、気仙沼市婦人会連絡協議会の鈴木玲子です。私は震災当日の夜から約 3 か月間、松岩公民館の避難所で、調理の責任者をしておりました。避難所では 600 名以上の方たちが避難をしていました。朝、昼、晩の 3 食、地域のボランティアが避難に来ている方たちと、「食べることが一番。しっかり食べて、心も体も元気」を合言葉に、被災した方たちが気力を取り戻し、前を向いて、立ち上がってくれるようにと、祈るような思いで調理にあたりました。食材はいうまでもなく、支援でいただいた品々。この時、市内の水産加工や流通関係の方々から、魚や加工してありすぐ食べられるような冷凍食品、缶詰、ふかひれスープなど、たくさんの品々を頂戴いたしました。あらためて感謝申し上げます。この時いただいた気仙沼の産物を調理しながら、そのおいしいこと、大変に質の高いことに改めて感心し、



感動してしまいました。おかげ様で、バランスの取れた、そして豪華な食事を被災者の方々に提供することができました。避難している方たちが、日に 3 度の食事を楽しみにしてくれました。ある女性は、「もう死んでもいいと思ったけど、もう 1 回生きてみるか、と思った」と話してくれました。透析を受けていたおばあちゃんは、お医者様に、「避難所でどんな食事しているの？ 検査の数値がよくなったよ」と嬉しい報告をしてくれました。外部から来たボランティアの方々が、「松岩公民館の避難所は、大変な中にも何か和やかな、穏やかな感じがする」と話していましたが、私は「食事のおかげだよ、食事のせいだよ」と密かに自負しておりました。気仙沼港から全国各地に豊かな海の幸を届けていますが、おいしさだけでなく、元気も心も一緒に発信、発送しているのだと思っています。

さて、私たち気仙沼市婦人会は、毎年、その時々 of 社会の状況や課題をテーマに研修会を行っています。被災の前年の平成 22 年は、「魚を食べて私も町もみんな元気」というテーマで、気仙沼漁協の村田専務と、市の管理栄養士の伊藤先生を講師にお呼びして、開催しました。自分や家族の健康のため、魚をもっともっと積極的に食生活に取り入れて行こう、また私たちの夫や家族、知人が一生懸命獲ってきた魚を、気仙沼市民としてもっと消費拡大を図っていこう、という目的でございました。会場の質問では、参加した面々の世代も関係していると思いますが、参加者のほとんどの家庭で毎日魚を食べている、という結果でした。しかし正直な感想として、身近に魚があるから食べるというのが現状で、豊かな食生活や健康増進のために、積極的に魚を食べるということは、私たちの次の取り組むべき課題だと思っています。ソムリエの木村克己さんは、「気仙沼は、神様がくれた世界には類のないピンポイントな町」と言われましたが、今度の震災で、その気仙沼は大きな痛手を被りました。でも気仙沼人は「負げれないね。負けてたまるか」と、復興に向けて立ち上がっています。何より海の彼方から、カツオが、トンボが、サンマが、海と夢と希望を背負って、うろこをひらひらさせながら泳いできてくれます。私たち消費者は、復興の象徴の魚であるカツオの水揚げを心待ちにしています。私たち気仙沼市民は、安全安心な魚をたっぷりいただきます。そして全国に元気とおいしい魚はもちろん、暖かい心も届けたいと思っています。

司会： ありがとうございます。鈴木玲子さんにお話をいただきました。

皆様、大変貴重なお話、本当にありがとうございました。会場の皆様、リレートークの 6 名の皆様に、改めまして大きな拍手をお願い申し上げます。ありがとうございました。それでは皆様ご降壇下さい。

続きまして、リレートークのアンカーという形で、ここで水産庁企画官、上田勝彦様にご登場いただきます。上田企画官は、島根県出雲市のお生まれ、長崎大学水産学部卒業後、長崎県野母崎漁協で漁業に携わり、平成 3 年に水産庁に入庁、境漁

業調整事務所、本庁加工流通課を経まして、現在増殖推進部研究指導課、情報技術企画官として、魚食普及や各地域の魚のPRにご活躍中です。それでは上田企画官、どうぞよろしくお願い申し上げます。

上田： どうも皆さん、こんにちは。上田と申します。今伺っていて、気仙沼は女性が元気な町でしょう、ここは。素晴らしいお話だと思いました。

3.11 があってから、ちょうど1年経ちました。この1年間、僕の仕事として何ができたかと言うと、もちろん直接被災地に入って支援していくっていうのは重要な事です。三陸への支援の結果、産物が消費地へ来た場合、それをちゃんと買ってもらえるのかどうか。つまり受け皿である消費者の問題。ここのところを今から強化しておかなければ間に合わないだろう、ということで、この1年半、そういう活動を続けています。それで先週は気仙沼にいました。

農業をやる人の話ですが、加工工場の冷蔵庫の中で腐ってしまった魚を肥料化し、山に持って上がって、海に負荷をかけないような農業をしようと、そういう人たちがいます。それで頭に來たのはですね、こっちのがれきをあっちへ、道一つ挟んであっちへ持って行ってはいけないのです。僅か数キロなのですけどね。「木1本たりともこっちへやるな」と言われたので、「なんで？」と返したら、「こっちは環境省の事業で、こっちは水産庁の事業だ」って言うのですね。「そんなもの状況に応じてやったらいいじゃないか」と話をしたわけなのですが、結局はそういうことなのです。現場にはいろいろなことがあって、これから生活が成り立つのかという状況で、厳密なる縦割りというのはよろしくないのかな、と実感した次第です。

震災後に気仙沼と接点ができたのは、ちょうど去年の秋でした。行列のできる法律相談所に出演されていた弁護士の住田さんと一緒に、気仙沼のカツオを都会で買って食って支えようと、「鰹を食べて復興支援」というイベントを築地で1回、大阪で1回やりました。

その時に震災後初めて気仙沼に来て、いろいろな話をした後、市長さんともお会いしました。帰りの汽車に乗る前に、スーパーでパックのカツオを買ったのです。まき網で獲れたカツオでしたね。それを4パック買って、汽車の中で開きまして、



住田さんと食べ始めたらあまりのうまさに、「えー、カツオってこんなにうまかったかな」と思ったのですね。あっという間に彼女と二人で奪い合うように、飲むように、カツオを食べてしまった。今日ちょうど上りカツオがちょうど水揚げされたということでさっき食ってきました。すばらしかったですね。まき網で獲れた小ぶりのカツオっていうのは、僕は東京にいるときあまり手を出さないのです。それで、内心馬鹿にして食べて噛んだら、すごい味なのですね、素晴らしい

味です。これが一晩置いて東京に行って、そしてスーパーに並ぶ時には、もう四つ割りされた段階でパックに並ぶわけなのですけども、色が灰色になって、血合がちょっと生臭い。そういうものになってしまうのですよ。ですからこんなもったいないことはないな、と思いましたね。だから一つ今日はっきり分かったのは、おいしいカツオが食いたければ、気仙沼に行かなきゃだめですね。産地に来て味わってもらわなきゃいけない。まき網カツオって、さんざん馬鹿にしたものが、ガラッと変わります。

さて、それじゃそういうカツオが都会に行くと、いいカツオは高いです。それで、スーパーで 7 時半過ぎると、半額シールとかペッと貼られるのはまき網のカツオなのです。そういうものを買って食っている都会の人は、何て言っているのかと言うと、「生臭くて刺身はだめね」と言っているのです。

あとカツオ料理ってレパートリーが少ないじゃないですか。どういう料理を知っているか。まずカツオのたたき、それから刺身。でも刺身は生臭いから家族には不評。と、こう言われているのですね。気仙沼在住の人から見たら、全然そんなことあり得ない、というようなことでしょうね。だけれども、実際そうなのです。ところがこのカツオをそのまま放っておくと、風評被害がでてきますから、どんどん都市部でのカツオの生消費というのは落ちて行かざるを得ないということは、もう明らかです。

さて、先週NHKの「あさイチ」という、連続ドラマ小説の後の 8 時 15 分から全国放送されている番組で、カツオ特集をやったのですよ。その時に僕にお声がかかりまして、ちょっと弱ったようなカツオをどう食べるか、という内容でした。これから具体的なカツオの食べ方について話をします。カツオは四つ割りにされてますよね。しかし、そのまま刺身にすると血生臭い。ということは、その血生臭さを取り除いてあげればいいわけですね。生臭みというのは、水に溶けるもの、油に溶けるもの、そして空気に触れるもの、この 3 種類があります。それをきちんと取り除くとちゃんと食べられるという、これが料理の仕組みであります。

どのように臭みを取り除くかという、まずカツオを節のまま、塩まみれにします。塩だらけ。メサバを作る時に塩だらけしますでしょう。それで水分が出てくるのを待ちます。だいたい 5 分から 10 分くらいですね。それからざっと流水で塩粒を洗い流します。刺身にする切り身を洗ってしまっているのか。いいのです。その方が断然生臭みが消えます。すばやく水気を拭いて、切ってショウガだけで食べる。薬味だけで食べる。これを塩カツオといいます。これ、昔から一本釣りの漁師の間で部分的に行われてきたことです。それをもう一度現代に持ってくると、これは過去のものでもあり、忘れられた新しい食べ方なのです。塩カツオを食べて「え、これカツオじゃないみたい」って言われたことがあります。カツオじゃないみたいじゃちょっと困るのですけども、そういうおいしいカツオの味というのが、塩一つに

よって味わえるということです。

さらにさらに、その塩カツオを板状に切ります。そしてさっと塩をふって塩まみれにして、冷蔵庫の中にぼんと入れておくのです。そして塩が浸透しますね。食べる時は塩粒を洗い流してから、そのまま薄くスライスして素洗いして、サラダに使ったり、洋風にも中華風にも何でもなるのですよ。その塩カツオを短冊に切って、1人前あたり3切れくらいかな。油も何も使わず、野菜と一緒に炒めます。そうすると、カツオから塩味が出ます。旨みも出ます。甘みも出ます。野菜が甘くなるのですよ。たった細い短冊3切れで、もうすばらしい野菜炒めが出来上がります。

こういうカツオの底力というのがあるわけですね。さらに塩カツオは塩分が濃いですから、冷凍庫でガチガチに固まらないのですね。ですから安い時にカツオをどんどん買ってください。色は関係ない。灰色でもかまいません。どんどん買って塩漬けにして、洗って冷蔵庫や冷凍庫に保存しておく。塩漬けにすると固まらないから、好きなだけ削れます。削ったら素洗いしてもよし、茶漬けにしてもよし。そのまま朝、あったかいご飯、熱々のご飯をそれでかっこんでもよしということです。

よく肉じゃがって言いますけども、またじゃがいもと、肉の代わりに塩カツオを使ってもうまいです。こういうふうに、たった一つのカツオが多段階に利用できて、これを塩カツオの多段活用と言っております。このように魚というのはカツオに限らず、気仙沼で獲れるメカジキも、まだまだ今までにないような食べ方、すそ野の広さというものがあるんだと思います。

先ほど主婦が二人、「カツオってたたきか刺身よね。刺身は生臭いよね。」と相談にいらっしやいました。今、これから復興に頑張る被災地が、都会に向けて魚を売ろうとした時に、ただでさえ魚離れと言われて30年経っているのですよ。一層進行しているわけですね。そういう時に、「カツオってどうやって食べるとおいしいの?」「たたきか刺身ですね」ということでは、売れ行きは絶対頭打ちですね。頭打ちです。それじゃあどうするかというと、今言ったように、食べ方の裾野を、しかも凝った料理ではなく、基本的に素材としてすごく使いやすい形にしてあげて、家庭でお母さん方が「そんな簡単にこんなおいしくなるんだったらやっちゃおう」というものをたくさん作っておく。そしてそれを発信する。こういうことはきわめて重要だと思います。

実際、今スーパーでも決まった、限られた魚しか売れなくなってきていますね。イカだとかタコだとか、サーモンだとかエビだとかという話になるわけです。何でかって言うと、日本人と魚というものは、ものすごく距離ができてしまっている。極端な言い方をすれば、日本人にとって魚はだんだん知らないものになってきつつある、というのが現実だと思うのです。知らないということは何か。知らないものは食べないということです。手に取らないのです。であれば、知っているものにしてあげれば、手に取るし、食べてくれるのですね。けれども、この開いてしまった

日本人と魚の距離を縮めるために、何が必要なのかといった時に、もちろんいろいろな食べ方を提案してあげるのも大切ですが、ここに絶対人が必要なのです。立ち売りや実演販売をするとよくわかります。僕はもう毎週のように魚を売って歩いているのですが、「お姉さん、安いよ、安いよ。ここ新鮮でうまいよ。」とか、「お母さん、これ煮つけにいいから持っていきなよ」とか、そういうことを言っても、下を向いてすーっと素通りして、行かれてしまう。お客様が心の中で何を言っているかと言うと、「その煮つけがわからないよ」と言っているわけです。今そういう状態なのですね。ですから、この離れてしまった魚と日本人消費者の間に人が立って、そういう短い言葉でわかりやすく、ぼんぼんと、たとえば今僕がやりましたが、伝えてあげる、そういう人材がどうしても必要になってくるのです。気仙沼の中でそういう人たちをぜひまず育成してほしい、というのがあります。

そして、都会の中にも志を持った連中がいますから、そういう人たちに協力をあおぐ。先ほどから話も出ていましたけれども、お金がない、財産も何もなくなっちゃった、そういう時に頼りになるのは、人と人のつながり。そしてそのつながりが線になってさらに面になっていく、そういうことだと思うのです。

Re-Fish（リ・フィッシュ）。「魚に帰ろう、魚に戻ろう。魚食をもう一度」ということ。「魚で始まる日本の食」。これは何かって言うと、「もう一度魚食べましょうよ、魚を知りましょうよ」ということです。結構デザインがいいのか、広がりつつあるのです。こういう会を震災後、立ち上げました。どういう集まりかと言うと、異業種の有志の会です。NPOとかではないです。完全に有志の会だから、志のあるプロの連中が集まっているから、メディア関係がいる、デザイナーがいる、芸術家がいる、魚屋がいる、漁師がいる。だいたい今 500 人います。

復興支援として、いろいろな所に船を出しました。一方で、我々は受け皿となる消費力を落とさないようにしよう、というキャンペーンを行いました。半年経って見えてきたことは、これは被災地だけの問題ではないぞということ。魚と日本人が離れてしまったというその問題。これは全国でやるべきだな、ということで全国展開に切りかえたのです。それまでは水産の復興支援を考える会、としていたのを、**Re-Fish**（リ・フィッシュ）という、全日本規模の組織に変えたわけです。

今まで魚を売ろう、売ろうとすると、どうしてもスローガンが出てしまうのです。どこでもそうです。例えば「魚食は日本の伝統文化です」とか、あと「自給率を高めましょう」とか、「漁業は蛋白源の安定供給です」とか、それから「第一次産業、食産業を守りましょう」とか。こう言うわけなのですが、さて、皆さん自分の過去を振り返って、今言った 4 つのスローガンが頭にあって、魚を買ったことのある人、手を挙げて下さい。いませんね。つまり 30 年間魚離れに対してがんばってきたにもかかわらず、そういったスローガンが何一つ響いてなかったのではないかと。つまり行政だったら響いています。ところが消費の現場、つまりお母さん方に

響いてなかった。これが大きな落とし穴でしてね。

我々が何を相手にしてこななければいけなかったかというと、これは消費者の気分なのです。例えば、今日焼き肉にしようとしている、あるいはお刺身にしようとしている、という時に、理屈じゃないですね。何となく、「あー、最近魚を食べてない」と言っ、て、魚にする。そういう消費者の何となく。判断も一緒です。その何となく、というところにどう働きかけるのか。これからの被災地が持っている、日本全国の水産業の抱える課題であることですね。

さあ、どうなっていくのでしょうか。僕の一つの答えは、この **Re-Fish** (リ・フィッシュ) というイメージですね。例えば、最近渋谷のギャルたちを集めて、煮干しのだしを飲んでもらう、あるいは塩カツオを食べてもらおうというイベントがありました。そうしたら、「やだー、なにこれ、やべー」と言っているわけです。それで「なんだ、なんだ？」って聞いてみたら、「初めてよ、初めてよ、こんなにおいしいの」って言うわけです。つまりすっかり魚と日本人が離れすぎちゃって、それで今や新しいものになっているのです。ここに僕は一つの希望を見出しました。新しいものとして、どんどん魅力を発信して売りましようよ、食べてもらいましようよ、ということなのです。

日本全国そうなっている中で、この気仙沼を始め、被災地はもう完全にリセットされちゃった状態です。1セット失ってしまった。今度立ち上がって行く時に、過去と同じ事をやるのか、ということなのです。同じ魚の売り方をしていたらやっぱり持たないです。なぜかと言うと、もうすっかり離れちゃって、消費者の胃袋はもう限界なのです。その頃に「身体にいいですよ」と言っても、胃袋は満杯です。この消費者の胃袋をもっともっと人数多く育てて行かなきゃいけないのです。他の業界は消費者を育てるということをやってきたのです。水産業は残念ながら、そんなことしなくても結構みんなそこそこやれてきてしまった。特に豊かな港ほどそうなのですけど、豊かに慣れ切ってしまったから、そういうところを割り切っちゃった。

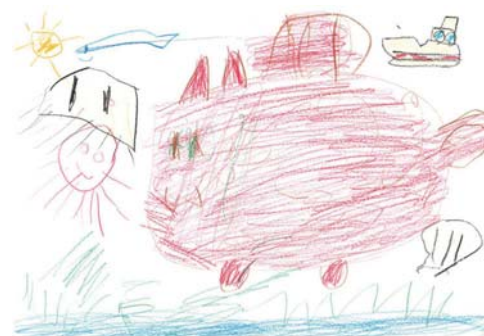
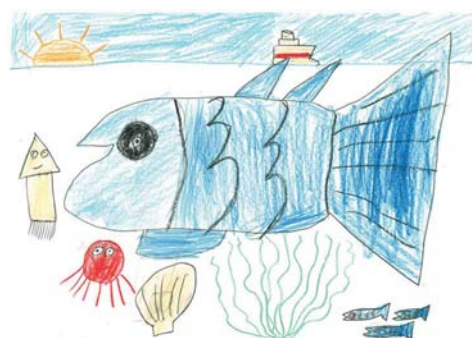
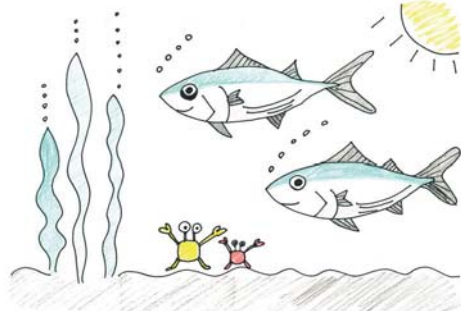
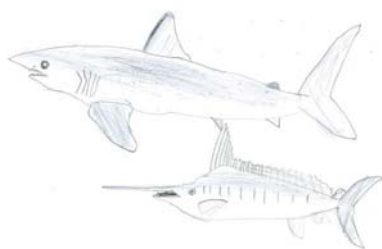
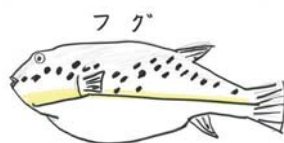
だから今が勝負時です。これから 10 年間、20 年間というのが勝負だと思います。遅くありませんから、一人一人が伝道師になったつもりで、魚の魅力をしっかり、しかもわかりやすい言葉で、魅力ある言葉で、周りに伝えるのです。そしてそういう言葉をもらった人というのは、また別の人に伝えてくれるのですね。そうやって日本全国の、「やっぱり魚だよな」というムードを作っていかなければならないな、とそのように思います。

それで、魚の消費をぐーっと引っ張り上げると、自動的に米と野菜がついてくるのです。自動的にね。肉を置いて行くのではない。充実した魚食ライフを送っていると、肉も輝いてくるのです。だから漁師さんが焼肉屋にうるさい。大変うるさい、ということでもあります。魚、米、野菜、そして時々肉、という、それが一つの次の世代、この震災の被害を超えて復興していく、次の日本の食の在り方じゃないかと

そのように思います。

今回こうして声をかけていただきまして、嬉しかったです。ああ、気仙沼もこれで外へ向けてどんどんまた輝いていこう、発信していこう、という気持ちになってきたのだなと思いました。これを皮切りに、いろいろな被災地でそういう事が起こっていくと思いますけども、その急先鋒、最旗手として、気仙沼これからも応援し続けます。ぜひ頑張っていたきたいと思います。お役に立てる事なら何でもします。スケジュールさえ空いてれば、どこにでも伺います。がんばってください。ありがとうございます。

司会： ありがとうございました。リレートークのアンカー、トリということで、水産庁企画官、上田勝彦様に力強くお話しいただきました。まことにありがとうございました。



第1部 シンポジウムー気仙沼元気アピールー

気仙沼市の良い子の皆さん



司会： さて、シンポジウムもフィナーレに近づいてまいりました。ここで最後に気仙沼元気アピールを、文字通り元気に行いたいと思います。アピールをしてくれるのは、気仙沼の良い子の皆さんです。どうぞ、ご登壇下さい。悪い子はいません。どうもありがとう。どうぞ上がって下さい。気仙沼の良い子の皆さん、そして付き添いのお母様です。このコーナーでは、皆さんのお友達に、「魚が好きだ。こんな魚が好きだ」でも、「気仙沼のこんな所が好きだ」とか、「復興を目指して」はちょっと難しいかな。「これからがんばるぞ」とか、元気になるような言葉を、全国の皆さんに向けて言ってもらおう、皆さんに宣言をしてもらおうということです。テレビの皆さんやラジオの皆さん、新聞の皆さん、フライデーの皆さんとか、たくさんいらしますから、元気に行きましょうね。じゃ、そっちの友だちから、お話を聞きながら、元気に言葉を言ってもらいましょう。はい、まずお名前教えて下さい。

良い子： チバミツキです。

司会： ミツキ君は、どこ小学校の何年生ですか？

良い子： 気仙沼小学校です。

司会： はい、何年生ですか？

良い子： 1年生です。

司会： 1年生のミツキ君。絵を描いてくれました。みんな魚の絵を描いてくれているのですね。きれいですね、このお魚はなんですか？

良い子： サンマです。

司会： サンマ。気仙沼のサンマは七色なのです。エンゼルフィッシュのようなサンマです。はい、じゃミツキ君。会場の皆さんに向かって、力強い言葉を行きましょう！

良い子： 気仙沼のお魚はおいしいです！

司会： おいしいです！よく言いました。ミツキ君でした、どうもありがとうございました



た。お母さんもありがとうございました。

司会： はい、お名前言えますか？

良い子： ヤマノモモカです。

司会： モモカちゃんの絵は何ですか？

良い子： フグです。

司会： はい、フグです。かたかなで描いてあります。とても上手なフグですね。モモカちゃん、練習した通り、元気な言葉を言いましょう。

良い子： 元気だよ！

司会： 元気だよ。モモカちゃん、元気です。ママも元気です。ありがとうございました。



司会： はい、お名前教えて下さい。

良い子： タイチロウです。

司会： どの何年生ですか？

良い子： 気仙沼小学校の3年生です。

司会： タイチロウ君が描いたこれは、何ですか？

良い子： リュウグウノヒメとナギナタナマズです。

司会： おじさん初めて聞きました。リュウグウノヒメとナギナタナマズ、おいしそうですね。タイチロウ君、皆さんに向かって一言元気に。相談するのですか、今から。打ち合わせしているのですか。感覚は大人です。タイチロウ君が言います、どうぞ。

良い子： 後7年以内に復興！

司会： 7年以内に復興。わかりやすいですね。7年以内ということは、タイチロウ君は7年以内だったら、13歳、14歳、中学生ですね。



司会： はい、お名前どうぞ。

良い子： アベコウタロウです。

司会： コウタロウ君、気仙沼小学校の3年生。名札に書いてあります。描いてくれた絵は何ですか？

良い子： ホホジロザメとマカジキです。

司会： マカジキですか。好きな魚は何ですか？

良い子： サメとマグロです。

司会： サメとマグロ、気仙沼ですね。よし、コウタロウ君、大きい声で行きましょう。

良い子： フカヒレ、最高！

司会： フカヒレ、最高！ですね。ありがとう。



司会： はい、お待たせしました。イケメン登場です。はい、お名前どうぞ。

良い子： イトウルイです。

司会： はい、ルイ君。描いてくれたのは何ですか？

良い子： 忘れました。

司会： 忘れました、えー、何でしょう。イカとか魚介、私
タイだと思いますね。きれいなお魚です。じゃあルイ
君、力強く皆さんに一言言おう！

良い子： カツオとマグロが大好きです！

司会： いいですね。ありがとうございました。カツオとマグロ、気仙沼の子どもですね。
はい、どうもありがとうね、待っていてくれてね。一生懸命おじさんの言っている
事にうなずいてくれてます。



司会： はい、お名前聞かせて下さい。

良い子： リクです。

司会： リク君が描いてくれたのは、何ですか？

良い子： お魚です。

司会： お魚ですか。何でしょう。大きい魚ですね。キンキ
にも見えますね。よし、リク君。練習した通りに行き
ましょう。ママと練習した通り、どうぞ。

良い子： マグロが好きです！

司会： ああ、そうですか。マグロよりもママが好きみたいです。うわー、盛り上がりま
すね、皆さん。



司会： はい、お待たせしました、お名前教えて下さい。

良い子： ナカムラショウヘイです。

司会： はい、どこの何年生ですか？

良い子： 幼稚園のユリ組です。

司会： 失礼しました。大人っぽく見えたので。幼稚園です。
実はショウヘイ君、パンフレットの表紙の絵を描いて
くれたのです。上手ですね。カツオを描いてくれまし
た。ショウヘイ君、今日はみんなの分も思いっきり大きい声で行きましょう。どう
ぞ。

良い子： 気仙沼のカツオとビンチョウ大好きです！

司会： ビンチョウが出ました。素敵な絵をどうもありがとうございました。

司会： はい、それじゃ僕、お名前は何ですか？

村田： オノデラカズアキ君です。



司会： はい、カズアキ君です。何歳？いくつ？何カ月ですかですか？

村田： 10 か月です。

菅原： まだ1歳になっていません。これから気仙沼を担うのですね。カズアキ君、魚は何が好きなのでしょう。

村田： 大きくなったらカツオを食べて、運動会で勝ったり、受験勉強にも勝ったり、災害にも勝ちたいと思っています。これからもっと伸びて、みんなが元気になるようにしたいと思っています。

菅原： そうですか。無理やり相手していただいておりますのは、気仙沼漁協の村田専務です。さあ、専務、カズアキ君の分も込めて、一言力強く。

村田： 水産物をもっともっと食べて、復興を早めたいと思います！

菅原： ありがとうございます。お孫さんとおじいちゃん、二人で宣言して下さいました。ありがとうございます。元気アピールの最後にみんな、お待たせしました。みんなで大きい声をもう1回出して、風船を放しましょう。みんなで、せいの「気仙沼の魚、日本一」と言ったら放しましょう。「気仙沼の魚、日本一」じゃ物足りないですね、皆さん。「世界一」でいかがですか？ 10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、せいの、「気仙沼の魚、世界一！」

今気仙沼の大空高く、希望を乗せてお魚の風船が上がりました。もう見えませんね。三陸沖まで偏西風に乗って、風船が流れて行きました。どうもありがとうございました。みんな、どうもありがとう。みんなにおみやげがありますからね。専務もありがとうございました。以上、元気アピールでした。

どうもありがとうございました。もう完璧に風船は見えません。どこに行っちゃったんでしょう。最後に皆さん、ご協力いただきまして誠にありがとうございました。以上をもちまして、気仙沼初開催の「第12回「食」と「漁」を考える地域シンポジウム 今年もカツオ水揚げ日本一をめざして」を終了させていただきます。第1部終了でございます。ご登壇いただいた皆様、そして最後までご清聴下さいました皆様、誠にありがとうございました。



第二部 交流会

気仙沼の魚料理を楽しむ

カツオ、フカヒレ、メカジキなど、気仙沼のおいしい魚料理、水産加工品が盛りだくさん。気仙沼の食の達人たちが腕を振るった料理を楽しみました。

【メニュー】

刺身盛	メカジキ、カツオなど
酢の物	芽かぶ、万坊、あぶりさんまの棒寿司、毛鹿の星
焼き物	沖ねう味噌漬
揚げ物	フカ肉の竜田揚げ
中 華	スープ3種（広東、四川、チャウダー）、フカ肉の麻婆豆腐、メカジキの油淋鶏風、くじらの青椒肉絲
洋 食	さんまのスパイスグリエ、メカジキのパストラミチーズソース、メカジキパン粉焼き、フカ肉のミラネーゼ、フカ肉のイタリアンマリネ、鰹のカルパッチョのりソース、鰹のポテトサンドのグラタン、あぶりさんまのロールモップス
菓 子	地酒ゼリー、階上いちご
その他	地元特産品



宮城県気仙沼市のサンマリン気仙沼ホテル観洋で6月6日、第12回「食」と「漁」を考える地域シンポジウム「今年もカツオ水揚げ日本一をめざして」が開催される。

第一部(午後1時から4時15分まで)は、水産庁増殖推進部研究指導課の森田貴己水産研究専門官の「魚と放

このシンポは、東京水産振興会と漁業情報サービスセンターが各地の漁業団体と共催で開いている。コーディネーターは、漁業情報サービスセンターの二平章氏とJF気仙沼漁協の村田次男専務理事が務める。

参加は先着300人で、第2部は参加費2000円が必要。

「食」と「漁」を考える地域シンポ 6月6日に気仙沼市で開催

射能のはなし」、馬場治東京海洋大学教授の「東日本大震災と復興問題」、菅原茂気仙沼市長の「水産基地気仙沼の復旧と復興計画」の各報告などが行われる。

第二部(午後4時30分から6時30分まで)として、交流会「気仙沼の魚料理を楽しむ」が開かれ、カツオ、フカヒレ、メカジキなど気仙沼のおいしい魚料理、水産加工品が味わえる。

▽問い合わせ先・全国窓口・東京水産振興会(松田氏)＝☎03-3533-8111、FAX03-3533-8116、Eメール tkyfish@blue.ocn.ne.jp、現地窓口・気仙沼漁協総務部(小野寺氏)＝☎0226-23-3400、FAX0226-23-3406、Eメール onodera-m@kesennuma-gyokyou.or.jp

菅原気仙沼市長も報告

で揚げ 沼水 仙初 気カッ

「これからがスタート」

16年連続日本一へ活気

気仙沼漁港にカツオが

初水揚げされた6日、魚市場は主力魚の登場に沸いた。昨年は震災で壊滅的な被害を受けながらも、生鮮カツオ水揚げ15年連続日本一を守った。関係者は「ことしも王座を死守する」と誓った。

(27面に関連記事)

「カツオが水揚げされれば街は活気つく。たくさん水揚げしてもらい、16年連続日本一を果たしたい」。仲買人の佐々木利重さん(48)は生きのいいカツオを見て、満足そ

うに語った。

仲買人の安藤竜司さん(47)も「これからがスタート。水産物の検査体制も整ったので、全国に安心なカツオを届けた」と強調した。

昨年は水揚げしたカツオを凍結・保管する気仙沼漁協(気仙沼市)の冷蔵施設が壊滅し、生鮮出荷に回さざるを得なかった。施設は2月に再開し、冷凍保存が可能になった。

同漁協製氷冷凍部の熊谷浩幸部長は「冷凍する

ことで加工用や輸出用に回せるようになるなど、受け入れ態勢は整った。多くの船団に寄港してほしい」と語る。

水産復興策など議論 シンポ

「カツオ水揚げ日本一をめざして」をテーマに、第12回「食」と「漁」を

考える地域シンポジウム(気仙沼漁協、漁業情報サービスセンターなど主催)が6日、気仙沼市内のホテルであり、関係者が震災後の水産復興の方

策などを語り合った。専門家による報告では、水産庁の森田貴己水産研究専門官が放射能について解説。放射性セシウムは魚の体内から排出されることなどを指摘し「海水中のセシウム濃度は下がっており、遠

る工場の復旧が遅れば、水揚げを震災前の水準に戻すのは難しくなる。

水産物仲卸「フジミツ岩商」の岩淵光男社長は「地盤沈下した土地のかさ上げの遅れが復旧を阻んでいる。業者の戦意を喪失させないよう、行政はスピード感を持ってインフラ整備を進めてほしい」と求めた。

気仙沼でシンポ

方泳いでいるカツオやマグロ、サンマに高濃度のセシウムが蓄積され続けることはない」と語った。

水産業の復興状況を分析した東京海洋大の馬場治教授は、沿岸漁業の再建について「震災後

は過渡的対策として船や施設の共同利用など協業化が図られた。経営安定化や地域産業の維持の上で、本格的な協業化を進めるべきだ」と提起した。

気仙沼市の菅原茂市長は国民の魚離れについて「水産庁のデータではこの10年間で魚食の量は激減している。魚を捕っていないことも原因にある」と指摘し、水産基地としての気仙沼の役割に言及した。

この日は気仙沼港のカツオ初水揚げとも重なり、約250人の参加者が「16年連続日本一」のスタートを期し、熱心に聴講。交流会ではカツオやフカヒレ、メカジキなど気仙沼産の魚料理を楽しんだ。

カツオ
水揚げ

今年も日本一目指し

「食」と「漁」を考えるシンポジウム開催

気仙沼支援

熱い思い、再起誓う

200人超参加 JF気仙沼漁協など

「今年もカツオ水揚げ日本一をめざして」と、気仙沼支援の第12回「食」と「漁」を考える地域シンポジウムが6月6日、気仙沼市港町のサンマリオン気仙沼ホテル観洋で開催された。200人を超す水産関係者、気仙沼市民が参加、気仙沼復興への熱い思いを聞き、再起を誓った。

長の木村玲子さんの6人がそれぞれ震災で経験したことや復興への思いをリレートーク。

上田勝彦水産庁増殖推進部研究指導情報技術企画官は、魚離れが言われ出して30年経つが、魚の食べ方を忘れた日本国民に新しい魚の食べ方を簡単に説明できる

ような「人」を育てることで、魚を食べる消費者を増やすチャンスの時と提言。

このあと、小学低学年以下の気仙沼のよい子9人と気仙沼漁協の村田次男専務が壇上に上がり、「気仙沼の魚はおいしい」「7年以内の復興を」「フカヒレ最高」「カツオとマグロが大好き」などと気仙沼の元気をアピール。第2部の交流会で「気仙沼の魚料理を楽しむ会」が行われ、参加者はメカジキやカツオなどの刺身盛り合わせ、フカヒレスープ、サンマなどの加工食品などに舌鼓を打っていた。

JF気仙沼漁協、東京水産振興会、漁業情報サービスセンターなどが共催。佐藤亮輔気仙沼漁協組合長は「復興のあり方をもう一度考え直すシンポジウムに、川口恭一サービスセンター会長は「これを契機に気仙沼の水産の復興を」と主催者あいさつ。

白井賢志気仙沼商工会議所会頭が「今年もカツオ水揚げ日本一を目指す

気仙沼にとり、意義のあるシンポジウム」「三鬼則行全国近海かつお・まぐろ漁業協会会長が「間もななく三陸沖のカツオ漁が始まる。気仙沼港が賑わうと確信」と来賓あいさつを行った。

二平章漁業情報サービスセンター技術専門員の趣旨説明のあと、水産庁増殖推進部研究指導課の森田貴己水産研究専門官が「魚と放射能のはなし」

と題し講演。放射能検査、調査対象魚種、放射線と向きとして真剣に育成する必要がある、と提言。菅原茂気仙沼市長は「水産基地気仙沼の復興と復興計画」について、気仙沼市の震災による被害状況を紹介したあと、魚市場の再建、水産加工施設の集積に取り組んでおり、気仙沼は先進的な水産基地に生まれ変わることを目指したい、と報告した。

このあと、魚問屋を経営している横山範子、全日本海友婦人会気仙沼支部の渡会かおる、気仙沼つばきの会の齋藤千津、沿岸漁業者の菅野一代、気仙沼市教育研究会食育部会長で気仙沼市立馬籠小学校長の木村玲子、気仙沼市婦人会連絡協議会

気仙沼の元気をアピールする子供たち



水産業、地域復興の取り組み紹介

「食」と「漁」を考える地域シンポ



あいさつする佐藤
気仙沼漁協組合長

生カツオ日本一の街 気仙沼で初開催

【気仙沼】宮城県気仙沼市で6日、「第12回『食』と『漁』を考える地域シンポジウム」が開催され、報告サービセンター(J

A F I C)の共催で気仙沼での開催は初めて。今年もカツオ水揚げ日本一をめぐして」を副題に東

日本大震災からの復興を目指す気仙沼の漁業、水産業をはじめとした取り組みや放射能問題などについて報告があった。

同シンポジウムは2009年から年間数回、日本各地で開催し、その土地ごとの魚種、漁業などをテーマに有識者の報告などを行っている。冒頭、

佐藤亮輔気仙沼漁協組合長(気仙沼水産業グループ運営会議代表、カネダイ社長)は「震災直後は途方に暮れたが、昨年は何とか生鮮カツオ水揚げ日本一の座を堅持できた。国や各業者、団体の支援

の賜物。水産業を基幹産業として発達した気仙沼が被災し、一からの出直しとなった。シンポは今後の復興の在り方についてあらためて考える場としたい」とあいさつ。

共催するJ A F I Cの川口恭一会長は「気仙沼は300年前から紀州のカツオ漁の技法が入って以来、銚子を経由して江戸へのカツオの物流があるなどカツオとの関わりが深い。カツオの水揚げ、

当シンポジウムが気仙沼の復興に少しでもつながれば」と述べた。

シンポでは森田貴己・水産庁増殖推進部研究指導課水産研究専門官による「魚と放射能のはなし」、馬場治・東京海洋大学海洋科学部海洋政策文化学科教授が「東日本大震災と復興問題」、菅原茂気仙沼市長が「水産基地気仙沼の復旧と復興計画」をテーマに講演。気仙

沼で水産業や食育に取り組み6人の女性パネリストによるリレートーク、上田勝彦水産庁増殖推進部指導研究課情報技術企画官がカツオをはじめとした魚介類の売り方、提案方法などについて実例を挙げて提言した。

第2部では当日早朝に初水揚げとなった生鮮カツオをはじめ、メカジキやサンマ、サメなど地元気仙沼の魚介類や加工品を振る舞い、「気仙沼の魚料理を楽しむ会」で参加者らが交流を深めた。

馬場東京海洋大教授

「沿岸漁業の継続的協業化を」

復興越えて長期取り組み強調

気仙沼シンポ

【気仙沼】一部既報「ない」と訴えた。

6日に宮城県気仙沼市であった「食」と「漁」を考えた地域シンポジウムで、馬場治東京海洋大海洋科学部海洋政策文化学科教授は、現在までの復興状況と今後の課題について講演した。馬場教授は漁業の協業化・協同化の動きについて触れ、「本格復興までの過渡的、一時的な動きにすべきでは

ない」と訴えた。震災に関わる補助事業として水産庁をはじめ、共同利用漁船等復旧支援対策事業や水産業共同利用施設復旧整備事業など、協業化や共同利用を前提としたさまざまな補助事業を実施し、被災した沿岸ではこれらを活用して漁船や漁具の整備を進めている。現在は事業によって整備した漁船・

漁具は共同で使用される。馬場教授は「協業化によって生産のコストダウンや販売戦略でメリットを出しやすい。同じ生産物で各地域で競争してつづし合うのではなく、スケールメリットのある操業が必要だ」と話した。試験的に協業を行って、いるノリ養殖では限られた乾燥機を6者が共同で

使用し、全て共販によって販売、利益を均等配分する。ギンザケは水産庁の「がんばる養殖」活用を機に6軒による協業を実施。イケス12基、船6隻を使って生産し、出荷後の利益は全て均等配分する。このような協業化は三陸地域だけでなく全国で49組織あり、うち協業により漁獲量の維持・安定の効果があったとする組織が53%、魚価維持・安定の回答が39%だった。



講演する馬場教授

馬場教授によると、協業化のメリットは漁獲維持、コストダウンによる魚価の安定はもちろん、「家族経営の場合、後継者がいなくなれば廃業し、地域の漁業そのものが縮小する可能性がある。協業化すれば、たとえ構成する一族に後継者がいなくとも、外からでも、内から

でも後継者を迎えて漁業としての産業を残すことができる」とし、「震災により、一度全て失ってしまったからこそ、将来の沿岸漁業のためには今がチャンスだ。三陸から新しい沿岸漁業の姿を構築していくってほしい」と結んだ。

「食」と「漁」を考える地域シンポとは

「農」や「漁」の営みは、人々が生きていくためのかけがえのない食料を生産し、農村や漁村において、自然と人間との調和的な関わりを保ちながら、地域文化の基礎をつくりだしてきたといえます。そして、農村や漁村での食料生産の営みの安定こそ、国の社会的安定性を維持するために重要不可欠なものであるといえます。日本の「食」を支える地域漁業の発展と魚食文化の育成のために、「食」と「漁」を考える地域シンポに取り組みます。

開催実績

第1回：銚子の魚イワシ・サバ・サンマの話題を追って

と き：2009年12月5日（土）13:00～16:00

ところ：千葉県銚子市・銚子市漁業協同組合4階大会議室

報告者：川崎 健（東北大名誉教授）・小林 喬（元釧路水試）・岡部 久（神奈川水技）

参加者：140名

第2回：食としてのカツオの魅力を考える

と き：2010年1月9日（土）13:00～16:00

ところ：愛媛県愛南町・御荘文化センター

報告者：二平 章（茨城大地総研）・河野一世（元・味の素食文化センター）・

明神宏幸（土佐鰹水産KK）・藤田知右（愛南漁協）・菊池隆展（愛媛水研セ）

参加者：110名

第3回：「黒潮の子」カツオの資源動向をめぐって

と き：2010年1月11日（月）13:00～16:00

ところ：高知県黒潮町・黒潮町総合センター

報告者：二平 章（茨城大地総研）・新谷淑生（高知水試）・東 明浩（宮崎水試）・

竹内淳一（和歌山水試）

参加者：120名

第4回：水産物の価格形成と流通システム

と き：2010年3月12日（金）15:00～17:00

ところ：東京都中央区豊海町・東京水産会館

報告者：市村 隆紀（水産・食料研究会事務局長）

参加者：80名

第5回：サンマの生産流通と漁況動向

と き：2010年8月21日（土）13:00～16:00

ところ：千葉県銚子市・銚子市漁業協同組合大会議室

報告者：本田良一（北海道新聞社）・小林 喬（元釧路水試）・鈴木達也（千葉水総研セ）・
小澤竜二（茨城水試）

参加者：110名

第6回：道東サンマの不漁をどうみるか

と き：2010年11月12日（金）13:00～16:00

ところ：北海道釧路市・マリントポスクしろ3階大研修室

報告者：中神正康（東北区水産研究所）・小林 喬（元釧路水試）・
森 泰雄（北海道釧路水試）・山田 豊（北海道荷主協会）・
本田良一（北海道新聞社）

参加者：170名

第7回：タコ日本一・魚のおいしいまちひたちなか

と き：2011年9月17日（土）13:30～17:30

ところ：茨城県ひたちなか市・ワークプラザ勝田

報告者：二平 章（茨城大地総研）・根本悦子（クッキングスクールネット）・宇野崇司（那珂湊漁協）・
根本裕之（磯崎漁協）・熊田 晃（磯崎漁協）・岡田祐輔（磯崎漁協）・
根本経子（那珂湊漁協）・千葉信一（多幸めしシジケート）・鯉沼勝久（㈱あ印）
横須賀正留（ひたちなかトカチャー研究会）・清水 実（ひたちなか商工会議所）

参加者：300名

第8回：鹿児島ちりめんの魅力を語る

と き：2011年10月15日（土）13:00～16:00

ところ：ホテルパレスイン鹿児島

報告者：廻戸俊雄（㈱ジャパンクッキングセンター）・小松俊春（元・江口漁協）・
堤 賢一（志布志市商工会）・田浦天志（志布志市商工会）・
大久保匡敏（鹿児島県機船船曳網漁業者協議会）

参加者：50名

第9回：黒潮のまちでカツオを語る

と き：2012年2月11日（土）13:00～16:00

ところ：高知県黒潮町総合センター

報告者：田ノ本明彦（高知県水試）・菊池隆展（愛媛県農林水産研究所）・
福田 仁（高知新聞）・嘉山定晃（長井水産㈱）・東 明浩（宮崎県水試）

参加者：70名

第10回：紀州漁民の活躍史とカツオ漁の今を考える

と き：2012年2月18日（土）13:00～16:30

ところ：和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場

報告者：川島秀一（リアスーク美術館）・坂下緋美（印南町文化協会）・杉本正幸（郷土史家）
雑賀徹也（郷土史家）・朝本紀夫（すさみ町商工会）・吉村健三（和歌山東漁協）

参加者：100名

第11回：スルメイカ・アカイカの資源動向をさぐる

と き：2012年5月9日（水）13:30～16:00

ところ：八戸水産会館

報告者：桜井泰憲（北海道大学）・木所英昭（日本海区水産研究所）
酒井光夫（国際水産資源研究所）

参加者：150名





第12回「食」と「漁」を考える地域シンポ 報告集

2013年3月 発行

■編集・発行 一般財団法人 東京水産振興会

〒104-0055 東京都中央区豊海町 5-1 豊海センタービル 7 階

TEL 03-3533-8111 FAX 03-3533-8116

社団法人 漁業情報サービスセンター

〒104-0055 東京都中央区豊海町 4-5 豊海振興ビル 6 階

TEL 03-5547-6886 FAX 03-5547-6881